

第7章 統合作戦の観点から見たフォークランド戦争

第1節 全般

第1項 イギリス軍

フォークランド戦争におけるイギリス軍を考察すると、イギリス軍が後に創設する統合組織³⁴²または部隊の嚆矢ともいえる運用をみることができる。当時は1996年にイギリス軍に創設されたような常設の統合司令部³⁴³および遠征作戦を前提とした即応性の高い部隊³⁴⁴を編成していなかったイギリスはフォークランドにおける不測の事態に海軍の艦隊(fleet)を中心とした臨時の任務部隊(Task Force)を編成して対処した。主要な指揮官は上陸群および陸上部隊も含め海軍(海兵隊を含む)の指揮官が就いた。上陸群の指揮官は準備段階から橋頭堡を確立するまで海兵隊の准将が就き、橋頭堡を確保し陸上兵力が増加してからは海兵隊の少将が就いた。

そもそも任務部隊とは一般に特定の作戦を実施するうえで、その作戦目的にふさわしい機能をもつ部隊を編成するために、通常大まかな機能別に編成され練成されている部隊を臨時に組み合わせて編成される臨時の混成部隊の場合が多く³⁴⁵、寄せ集められた部隊が同じ軍種に属しても特定の訓練を一緒に実施していない場合がある。特に通常実施されることのない作戦を実行する場合、定められた作戦手順の作戦であっても未習熟なため、部隊間の連携などがうまくいかない可能性がある。

アルゼンチン軍によるフォークランド諸島侵略に対しイギリス政府がたてた最終目的である「可能な限り速やかにフォークランド諸島およびその属領からアルゼンチン軍を撤退させ、イギリスの統治を復活させる³⁴⁶」ためには、イギリス軍はフォークランド諸島を奪回する(repossess)する作戦、換言すれば、水陸両用作戦が不可欠な作戦であった。水陸両用作戦において、陸上兵力を上陸させるうえでの前提条件は上陸前には地域の制海権および航空優勢が確立されていることである。一般に水陸両用作戦を成功させるために必要な上陸側の兵力は防衛側の兵力の3倍は必要といわれており、最終的にイギリス軍の陸上兵力の規模は海兵隊に陸軍の兵力を追加することになった。

イギリス海兵隊は水陸両用作戦における上陸兵力の専門兵力として組織、訓練されそのための装備を保有する兵力である。イギリス海兵隊は、水上艦、潜水艦、艦隊航空機から成るイギリス海軍(Royal Navy)および補助艦船から成るイギリス艦隊補助部隊と同じ広義の海軍(Naval Service)に属し、イギリス海軍(Royal Navy)と共に広義の海軍(Naval Service)として行政管理されている。つまり水陸両用作戦の上陸兵力の主兵力である海兵隊(歩兵)と海軍(艦艇)は行政管理上、広義の海軍という同じ軍種(service)に属する。

「joint(統合)」とは、「少なくとも2つの軍種(Services)の部隊が関与する活動、作戦および組織を表す

³⁴² 統合ドクトリンの研究、海軍と空軍のハリアーの統合、各軍のヘリコプタの統合、後方組織の統合など。

³⁴³ 常設統合司令部(Permanent Joint Head Quarter: PJHQ)

³⁴⁴ 統合即応対応兵力(Joint Rapid Reaction Forces: JRRF)

³⁴⁵ アメリカ海軍大学著(瀧澤三郎,大日向郁夫訳編)『勝つための意思決定』(ダイヤモンド社、1991年10月)38-39項。

³⁴⁶ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.197.

のに使用される形容詞³⁴⁷」である。この意味からいえば、イギリス軍において水陸両用作戦におけるイギリス海軍 (Royal Navy) と海兵隊の関係は統合の関係ではない。イギリス海兵隊は水陸両用作戦における上陸兵力の専門兵力として組織、訓練されそのための装備を保有する兵力であるが、この海兵隊の主任務ともいえる水陸両用作戦に対する当時の認識として次のようなものがあった。

「水陸両用作戦とは、時代遅れの作戦概念であり、特別な専門的な能力を必要としない、一時的に海兵隊により行われる作戦である。」というものがあつた。(1981年6月16日の『ザ・タイムス(The Times)』誌掲載記事より)

第2項 アルゼンチン軍

アルゼンチン軍の統合に関してはすべての段階で重大な問題があつたという指摘がアルゼンチン軍内部にあつた。アルゼンチン軍の空軍の参謀長(Ernesto Crespo)の報告書での指摘である³⁴⁸。報告書によれば空軍の南方司令部と南大西洋司令部の間には効果的な協力がなかつたとしている。海軍は実際の戦争計画を作成せず戦争に突入し、計画を統合することを拒否したとしている。また、アルゼンチン軍は統合作戦に関するドクトリンを持っておらず、それぞれの軍には「統合行動」(joint action)に対し全く異なつた考え方および戦略があつたと報告している。

同報告書によれば、アルゼンチン海軍は洋上偵察任務を効果的に組織することに失敗し、存在しない目標に飛行させた海軍のパイロットの誤つた報告があつたと断言している。陸軍と海軍の協力が非常に悪く空軍は自軍で偵察および目標の選定を行うことになり、フォークランド諸島に関する情報なしで作戦しなければならなくなつたことを指摘している。

また、アルゼンチン軍は統合作戦に関してほとんど知識がなく、イギリス海軍が本格的に行動を起こすまで、サン・カルロスにイギリス軍が上陸する可能性を受け入れなかつた。このためシュペル・エタンダールに対する空中給油機の割り振りを効果的に実施できなかつたため、有効な行動ができず、または飛行を取り止めることになつたという。

戦術的面で統合に関する着意のなさが指摘されている。アルゼンチン海軍の航空母艦に関してである。アルゼンチンの航空母艦、「ベインティシンコ・デ・マヨ」は1980年から81年にかけて飛行甲板を拡張し、カタパルトを強化した。しかし、同空母の最高速度は、24ノットと低く、対艦ミサイルを発射できるシュペル・エタンダール機を確実に運用することはできなかつたとしている。

第2節 統合という観点から見たイギリス軍

当時のイギリス軍は、遠征して統合作戦を行う態勢、統合の態勢にはなつていなかつた。同じ海軍に所

³⁴⁷ Allied Administrative Publication, "NATO Glossary of Terms and Definitions"より。

³⁴⁸ Anthony H. Cordesman, Abraham R. Wagner, Ch. 3, "The Falklands War," *The Lessons of Modern War*, vol. III (Boulder, CO: Westview Press, 1991), pp.328f.

属の水上艦艇部隊、海兵隊の間でさえ、水陸両用作戦の手順を十分に共有していたわけではなかった。

第1項 部隊編成から見た統合の状態

任務部隊³⁴⁹の構成単位（任務群(Task Groups)、任務隊(Task Units)、分隊(Task Elements)）およびその編入兵力は作戦の進展により変わったが、シー・ハリアーを搭載した航空母艦2隻、ミサイル駆逐艦およびフリゲート艦からなる任務群（「空母戦闘群」）、水陸両用艦艇からなる任務群（「水陸両用群」）そして海兵隊第3コマンド旅団を中心とした任務群（「上陸群」）、第3コマンド旅団と陸軍兵力で編成された軍（「フォークランド諸島陸上軍」）が根幹となった。

a 海兵隊と陸軍の混成部隊となった陸上軍の編成

当初の陸上兵力は海兵隊第3コマンド旅団が中心となり、フォークランド諸島のアルゼンチン軍の守備隊の兵力に関する情報に応じて、陸軍の兵力が第3コマンド旅団に徐々に配属されていった。「エンデュランス」とフォークランド諸島の首都スタンレーの無線電話交換手との会話から得た情報により³⁵⁰、第3空挺大隊が配属された。第3空挺大隊は陸軍第5歩兵旅団所属の大隊である。イギリスは第5歩兵旅団を北大西洋条約機構（NATO）の域外用の予備兵力に指定していた³⁵¹。第3空挺大隊は第5歩兵旅団のなかで即応性の高い「先鋒部隊」であった。第3空挺大隊のほかに防空兵力としてレピア地対空ミサイル部隊の第12防空連隊のT砲兵中隊が配属された。装甲兵力は偵察装甲車隊(Medium Recce Troop, B Squadron, The Blues and Royals)が配属された。レピア地対空ミサイルは12基、76ミリメートル砲装備のスコープオン4両、30ミリメートル機関砲装備のシミター4両およびサムソン装甲回収車1両をフォークランド諸島に持ち込んだ³⁵²。第3空挺大隊は第3コマンド旅団の大半と共に徴用した客船「キャンベラ」に乗船し、4月9日に出発、約2,000トンの弾薬および補給品は徴用した「エルク」に搭載され輸送された³⁵³。

4月15日に第3コマンド旅団に陸軍の部隊（900名）を追加配属することが決まった³⁵⁴。陸上作戦に対する考えが明確になっていない段階での慎重な増派であった。増派の必要性について司令部内で同意は得られていない段階であった。兵員の増加は後方面での負担を増やす³⁵⁵。追加配属の陸軍兵力は第2空挺大隊、第4野戦連隊の第29中隊、第9空挺工兵中隊、空挺処理隊(Parachute Clearing Troop、(野外衛生班))、陸軍航空隊第656飛行中隊の1個小隊（スカウト・ヘリコプター3機保有）であり、すべて第5歩兵旅団

³⁴⁹ 任務部隊(Task Force:TF)は作戦実施のために幾つかの部隊からなる系統だった組織である。任務部隊は指定されたすべての部隊を含む。任務群(Task Groups:TG)は任務部隊の最も大きな独立した部隊である。任務群から特別任務に派出された部隊が任務隊 (Task Units:TU)、任務隊からさらに特定の役割のために派出されるのが任務分隊 (Task Elements:TE) である。これらにはすべて番号が付与され、どの上位組織に属するかが識別できるようになっている。(David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, 1987, p.16.)

³⁵⁰ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military,p.76.

³⁵¹ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military,p.76f.

³⁵² Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military,p.77f.

³⁵³ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military,p.80.

³⁵⁴ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.199.

³⁵⁵ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.199.

の兵力であった³⁵⁶。配属された陸軍兵力はすべてトンプソン海兵隊准将の指揮下に入り、海軍は任務部隊の全体の指揮権を維持した³⁵⁷。第2空挺大隊は4月26日、徴用した北海カーフェリーの「ノーランド」に乗船して出発³⁵⁸、大砲、ヘリコプターおよび他の重装備は徴用した「ユーロピック・フェリー」で輸送された³⁵⁹。

フォークランド諸島のアルゼンチン軍兵力に関する最新の情報によればアルゼンチン軍は7個大隊規模の兵力になっていたため、フィールドハウスは4月27日、1個旅団の追加を要求した。候補となった第5歩兵旅団はすでに第2空挺大隊および第3空挺大隊が抜かれ、唯一、第7代エディンバラ公グルカ小銃兵第1大隊が残っていた。グルカ小銃兵第1大隊はネパールの部隊である。ウェールズ近衛第1大隊(1st Battalion, Welsh Guards)とスコットランド近衛第2大隊(2nd Battalion Scots Guards)が第5歩兵旅団に配属されることになった³⁶⁰。しかし、この2つの大隊はすべての陸軍の大隊と同様、水陸両用戦の訓練を実施したことはなく、装備も有していなかった。このため4月16日以降、ウェールズの演習場で訓練を実施し準備を進めていた³⁶¹。大規模な増派となることから、増派の必要性が任務部隊司令部で議論された後、5月2日、最終的に1個旅団(第5歩兵旅団)の増派が戦時内閣で認められた³⁶²。このほか、NATOの任務についていた第4野戦連隊(第5歩兵旅団は砲兵隊を保有していなかった)、工兵連隊、陸軍の航空隊および後方支援部隊も派遣された。第5歩兵旅団の指揮官はトニー・ウィルソン陸軍准将(Brigadier Tony Wilson)が就いた。また、陸上軍の規模が2個旅団と師団規模となったため、陸上作戦を指揮する組織としてフォークランド諸島陸上軍(Land Forces Falkland Islands: LFFI)が設けられ、指揮官には海兵隊のムーア少将が就いた³⁶³。第5歩兵旅団の兵員は徴用した客船「クイーン・エリザベスII」(Queen Elisabeth II:QEII)に乗船し5月12日に、装備品、車両などは5月13・14日に徴用した「アトランティック・コーズウェー」に搭載されてデバンポートを出発した³⁶⁴。

³⁵⁶ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.82.

³⁵⁷ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.82.

³⁵⁸ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.82f.

³⁵⁹ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.83.

³⁶⁰ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.215f.

³⁶¹ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.215f.

³⁶² Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.216.

³⁶³ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.33.

³⁶⁴ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.217.

図第1 イギリスのフォークランド諸島陸上軍(任務群317.1)の構成(1982.5.20～)

司令官はムーア海兵隊少将(～5.19までは司令部の副司令官(陸)) 副司令官は陸軍の准将

任務隊317.1.1: 第3特殊作戦旅団トンプソン海兵隊准将	任務隊317.1.2: 第5歩兵旅団ウイルソン陸軍准将
<p>第3特殊作戦旅団司令部、通信中隊(海兵隊) 第40、第42、第45特殊作戦大隊(海兵隊) 特殊作戦支援連隊(海兵隊) 海兵隊“Y”通信隊 第49爆発物処理中隊(海兵隊) 特殊作戦部隊案隊(海兵隊) 第3特殊作戦旅団航空中隊(海兵隊) 第1奇襲中隊(海兵隊) 山岳・北極圏戦専門部隊(海兵隊) 特殊舟艇中隊(SBS)・第2、第4、第6小隊(海兵隊) 第845、第846海軍航空中隊(海軍) 外科支援班(海軍) 第29(特殊作戦)連隊(陸軍) 第143特殊作戦前方観測大隊(陸軍) 第59独立特殊作戦中隊(陸軍・工兵隊) 支援揚陸船、組立型動力艇分遣第17港湾連隊(陸軍・輸送隊) 衛星通信派遣隊(陸軍・通信隊)</p> <p>陸軍から3特殊作戦旅団への編入部隊</p> <p>第2空挺大隊(～5.31)、第3空挺大隊、 騎兵“B”中隊偵察小隊 12防空連隊“T”大隊、4野戦連隊前進観測幹部部隊 陸軍・通信隊第30通信連隊、陸軍医療・歯科部隊19野戦病院 第2ブルース・アンド・ロイヤルズ騎兵B連隊 空挺特殊作戦部隊(SAS)“D”“G”中隊“B”中隊第6、第8小隊 空軍(RAF)派遣特殊部隊(SF)</p>	<p>スコットランド近衛第2大隊、ウェールズ近衛第1大隊 第2空挺大隊(5.31～)、ゲルカ小銃兵第1大隊 陸軍第4野戦連隊、第49野戦連隊前進観測幹部部隊 第32誘導武器連隊43防空大隊 工兵隊第9空挺中隊 工兵隊第20野戦支援中隊 陸軍航空隊第656飛行中隊 第5歩兵旅団司令部、通信中隊 第66後方リンク分遣隊 陸軍補給部隊第9補給大隊ランドリー／ペーカリー分遣隊 陸軍補給部隊第81補給小隊 陸軍輸送隊第17港湾連隊 陸軍電気・機械修理部隊第10野戦作業班 陸軍電気・機械修理部隊第10航空機作業班 陸軍医療部隊第16、第19野戦救急班 陸軍医療部隊第2野戦病院分隊 第160陸軍憲兵隊小隊 陸軍会計隊第6野戦經理班 陸軍情報隊第172情報班</p>

Linda Washington ed., *Ten years on: The British Army in the Falklands War*などを基に作成

b 任務部隊の司令部と戦時内閣との関係

(a) 参謀長委員会議長ルウィン大将

イギリスの「コーポレート作戦」における指揮系統には既存のものとは異なる2つの指導原理により構築されていたの指摘がある³⁶⁵。1つ目は、最終的な権限および責任は時の政府にあるということである。2つ目は作戦の実施は最も関係ある軍種に任せるというものであり、フォークランド戦争の場合、最も関係がある軍種は海軍であった³⁶⁶。また、「コーポレート作戦」における指揮系統の特徴として、戦時内閣から国防省を経由せず、直接、任務部隊司令部のフィールドハウス司令官に直接つながったという点がある。国防省は作戦面を担当する組織というより管理的な組織だったためである。ただし、参謀長委員会は「コーポレート作戦」実施に関して、フォーラムのような機能を果たしており、任務部隊司令部が戦時内閣に作戦面の承認を得る際は参謀長委員会の参謀長の合意をとっていた。また、「コーポレート作戦」における指揮系統上に特徴として次のような背景があった。

ルウィン参謀長委員会議長は国防相であった自分よりはるかに重要であったとノットは回想している。

³⁶⁵ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.92.

³⁶⁶ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.92.

参謀長委員会議長を、そしてルウィンをそのような立場に置いたのは他ならぬノット自身であった³⁶⁷。というのは、参謀長委員会議長の権限を変更したのはノットであった。

それは、1981年にノットが国防相に就いて、特に海軍の予算が計画を超過し膨れ上がった国防予算へ対応策の参謀本部(Chiefs of Staff)に求めたことに始まる。その頃の参謀長委員会議長はそれこそ議長の権限しかなく、各軍の参謀長の同意を得た結論を単に提出する役割であった。海軍将官であるルウィンは、海軍の事業計画の実現のために痛みを分け合おうとしない他軍の参謀長に悩まされていた。1982年の海軍の予算はトライデントの予算を除いても40億ポンドを超えており、大規模な海軍を保有していた、第二次世界大戦後の1950年当時の予算でさえ25億ポンド(1982年の物価で)であった³⁶⁸。

ノットに参謀長委員会議長に他の参謀長への指図を可能とする権限を要求した。ノットはサッチャーの了解を得て各軍の参謀長に対する参謀長委員会議長の地位および権限を変えた。こうして、参謀長委員会議長は、政府の第1の軍事面の助言者となった。フォークランド戦争が始まる約3カ月前のことである³⁶⁹。また、ノットはサッチャーから戦時内閣への国防省の軍事上の提案の仕方を尋ねられた際、その役割はルウィン参謀長委員会議長に行わせると返答した。ノットの考えは戦時の国防相の役割は参謀長委員会議長に支えられ首相が担うべきだというものである。第二次世界大戦の際に、チャーチルがそうしたように、首相が国防相を兼ねるべきだと考えた³⁷⁰。こうして参謀長委員会議長ルウィンは政府の軍事面の助言者として戦時内閣に出席し、戦時内閣で決定されたことを各軍種に伝えることになった。

つまりフォークランド戦争当時、参謀長委員会議長の議長は政府の第1の軍事面の助言者となっており、直接首相に接見する権利を持っていた³⁷¹。海軍、陸軍および空軍の参謀長は、自軍に関する事項に関する政府の先任の軍事面助言者として関係事項について直接首相に接見する権利を持っていた³⁷²。議長は外交政策および防衛問題を検討および決定する内閣の常設の委員会、「防衛および海外政策委員会」(Defence and Oversea Policy Committee)、いわゆる、「防衛委員会」(Defence Committee)に必要に応じて軍事専門家として助言をするために出席することになっていた³⁷³。

(b) ノースウッドの任務部隊の司令部とフィールドハウス司令官

任務部隊の司令部はロンドン郊外のノースウッドにあるイギリスの艦隊司令部内に設けられ、「コーポレート作戦」全体の指揮はその地下の作戦室で行われ、作戦室では毎日、午前と午後に作戦室で状況説明が行われた。ノースウッドは海軍が艦隊の司令部を移動させるまで、沿岸防衛司令部が置かれていた場所である。数ヤードの近所には北大西洋条約機構(NATO)の東大西洋作戦指揮所(NATO Eastern Atlantic Command Operations Centre)があった。任務部隊司令部は陸軍、海軍からの増員で一杯となった。情報

³⁶⁷ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.75.

³⁶⁸ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.76f.

³⁶⁹ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.75.

³⁷⁰ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.75.

³⁷¹ Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.94.

³⁷² Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.93.

³⁷³ Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.94.

班ができ、空軍の人員・物資空輸管制士官、通信の専門家、連絡士官がつめていた。第3コマンド旅団を出発させた後、ノースウッドに移動してきたムーアの司令部の幕僚はNATOの作戦室を利用した³⁷⁴。

任務部隊の司令部が立ち上がってすぐ、フィールドハウスの指示により「後方支援班」(Logistic Support Cell)が設けられた。3軍からなり任務部隊の後方面のすべての要求および補給計画の調整が任務であった。フィールドハウスは希少な資源を最適かつ経済的な使用および最も緊急の備品類の補給の優先順位を決めるためにこの班を設置したと説明し、極めて重要で最も成功した組織だったとも評価している³⁷⁵。

任務部隊全体の司令官となったフィールドハウス(54歳)は、フォークランド戦争期間中、ロンドン郊外のノースウッドから直接、作戦を指揮した。衛星通信がそれを可能にした。そして、任務部隊が遠征する前に政府が部隊にあらゆる手段を許可(with no-holds-barred)をしないで、イギリス政府は、作戦の拡大・進展を統制できた。現在の技術からすれば満足とはいえない衛星通信であったが、外交交渉の状況などに応じ、緊急の事態でも武力行使の許容の程度を遠方の指揮官に迅速に伝えることが可能であった。「コーポレート作戦」では任務部隊が必要な決定に関してほとんど待たされることはなく、任務部隊が必要とする交戦規定(ROE)は常に用意されていたという³⁷⁶。

(c) 戦時内閣と交戦規定(ROE)

「コーポレート作戦」における政治的な要請と軍事的な要請の調整は交戦規定(ROE)に関する議論と承認という過程で行われた。フォークランド戦争開始後、各軍参謀長は、毎朝、交戦規定(ROE)に関する要請を決めるため集まった。その場には、通常、ノットも参加し情報の概要説明および報道に関し検討が行われた。ルウィン参謀長委員会議長は他省の事務次官に概要を説明した。その後で、戦時内閣に出す提案がノットとルウィン間で合意された。イギリス政府がフォークランド戦争の戦争指導を行った戦時内閣³⁷⁷の会議は戦争期間中ほぼ毎日1000時に行われた。

交戦規定(ROE)の承認に関して国防相だったノットは次のように回想している³⁷⁸。

政治問題化したアルゼンチン巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」に対する攻撃許可は簡単であった。他に選択肢はなく、首相、ルウィン、ノットで迷うことなく決めたという。その理由は、傍受した通信から、イギリスの任務部隊の艦隊にアルゼンチン海軍が挟撃行動を進めているのを知っていたためと説明している³⁷⁹。

³⁷⁴ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.119.

³⁷⁵ John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), p.16111.

³⁷⁶ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.93.

³⁷⁷ "War Cabinet" (戦時内閣) という呼称は、メディアの略式表現であり正式には内閣の国防・外交政策委員会の南大西洋サブグループ(OD(SA))という名称である。構成員は、サッチャー首相、内務相(ウィリアム・ホワイトロー)、外務連邦省相(フランシス・ピム)、国防相(ジョン・ノット)、保守党との窓口役(point of contact)のセシル・パーキンソン、参謀長委員会議長のテレンス・ルーウィン海軍大将。国際法関連事項があるとき法務相(マイケル・ハーバー)が参加した。大蔵相をハロルド・マクミランがサッチャー首相にメンバーに入れないことを助言したことを受けてか、大蔵相はメンバーにはならなかった。

³⁷⁸ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.76.

³⁷⁹ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.76.

交戦規定(ROE)の承認に関して困難だった案件はあまり重要ではない事案だったという。民間の航空機および民間の船舶が情報収集活動に使用されていた場合に任務部隊にどんな許可を与えるべきかである。また、旧ソ連の潜水艦および偵察などの装置を装備した漁船への対応、任務部隊の上空を通過しアルゼンチン海軍に情報提供する南アメリカの民間の定期便への対応が困難な案件であったという³⁸⁰。

・パラケット作戦(Operation Paraquet)と交戦規定(ROE)

サウス・ジョージア島の奪回は、イギリスにとって最初の主要な作戦であった。その作戦のための交戦規定(ROE)は4月15日の参謀本部(Chiefs of Staff)で検討された。交戦規定(ROE)は、1つ目はサウス・ジョージア島までの公海上通過段階、2つ目はアルゼンチンが宣言した排除水域(defence zone)内通過、そして第3の作戦の実施の3段階に分けて検討された。翌日には修正した交戦規定(ROE)が戦時内閣に提示された³⁸¹。

1つ目は大きな問題はなく、挑発を避けることが最優先であったが、決意をもって侵略に対応するというものであった。すべての兵力は攻撃を受けた兵力を防衛するために支援はできるが、明確な交戦する意図に対して水上艦艇は最小限の武力行使を行う。指揮官は明白に規定された目的を遂行するために必要と考えない場合以外は国際法(海戦)を破らない。原子力潜水艦は隠密を維持。もし探知されれば回避する、攻撃された場合に限り敵と交戦する。ルウィンはこのことをほとんど危険はないと考えた。公海上で遭遇する可能性はフォークランド諸島の海上排除区域で遭遇するより本質的に低いと考えたためである³⁸²。

2つ目のサウス・ジョージア島周辺海域にアルゼンチンが宣言した排除水域内を通過する際の交戦規定(ROE)である。ここでの目的はアルゼンチン軍に排除水域の実施を思いとどまらせるために十分な兵力を誇示することであった。ここでは、ルウィンは修正している。水上艦艇に確実にアルゼンチン艦艇と識別された目標に対し、海軍または商船のどちらであっても、さらにアルゼンチン軍機に対し必要な行動がとることを許可するという内容の案にルウィンは変更した。アルゼンチンの艦艇でない目標は針路を変更させる。アルゼンチン潜水艦の場合は、敵意を明らかに示した場合には攻撃できる。もし、敵意を示さない場合は、まず、引き返す指示を行い、針路を阻み、そして、そのことが失敗した場合に限り、目標の艦首方向に警告射撃を行う。原子力潜水艦は確実に識別され、敵意を示すアルゼンチン軍の潜水艦、艦艇、補助艦に対する攻撃が許される。当初、リーチはすべての艦艇が警告を実施せずに攻撃できることを望んだ。しかし、外務連邦省および国防省の上級の文官は警告せず商船を攻撃すれば戦争犯罪と見なされるのではないかと懸念した。法律の顧問は警告をせず商船を攻撃することは、政治的な危険は別にしても、犯罪行為になる可能性があることを確認した。ノースウッドで潜水艦を指揮したハーバート中將にとって、これらの交戦規定(ROE)は穏健派とかタカ派といった問題ではなかった。現場の者にとって、一般的な気象などの環境状況の中で、探知および中立化のためにわずかな時間に、攻撃の警告を数分でも行うということ

³⁸⁰ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI Journal*, April 2007, vol.152, p.76.

³⁸¹ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.232.

³⁸² Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.232.

を想定する交戦規定(ROE)の議論は、現実的ではなかった³⁸³。

3 つ目は「パラケット作戦」の実施の段階における交戦規定(ROE)である。目的は、サウス・ジョージア島の奪回であった。イギリスの水上艦艇はこの目的を達成するために、アルゼンチンと確実に識別された艦船および航空機に対し必要とする行動をとれる。敵意を明確に表すどの潜水艦に対して攻撃ができる。原子力潜水艦は第2段階で示された規定と同じ指示を順守する。ルウィンが戦時内閣に説明している。攻撃位置に占位しているすべての敵は明らかに敵意を明確に示している。そのような状況の場合、イギリス艦艇は潜在的な敵に先に攻撃させる義務はない。ルウィンは潜水艦とことなり、水上艦は遭遇した潜水艦が原子力潜水艦なのか、通常型潜水艦なのか、アルゼンチン軍の潜水艦なのか評価するのは困難ではないかと心配した。しかし、躊躇はイギリス艦艇を危険にさらすことになる。これは、当分の間、許容できる危険であったが、ルウィンはもし、外交の状況が細心の注意を要するまでもない状態になったら、そのような事態において、より制約のない政府の権限を要求することを伝えている³⁸⁴。

「パラケット作戦」における交戦規定(ROE)に関して戦時内閣の承認を得る際に、国防省は既存の交戦規定(ROE)の改定の承認も首尾よく得た。それは、任務部隊の先遣艦艇がアルゼンチンの海域に近づいたためであり、アルゼンチン海軍の艦隊の大半が洋上で行動していたためである³⁸⁵。海軍からの要求で、参謀本部(Chiefs of Staff)は、脅威に対抗するために十分な自由裁量をイギリスの部隊に与えるために交戦規定(ROE)を少し変更しようとした。アルゼンチン海軍は射程 25 マイルの艦対艦エクゾセ・ミサイルを装備した艦艇を保有しており、通常の警戒または航海用レーダーで目標を捕捉できるので攻撃の危険を知らせる兆候を与えはしない。仮にアルゼンチンの潜水艦が魚雷を発射した場合にも同様に兆候はなく、攻撃された目標が攻撃を受けた時にしか知ることができないとの情勢分析があった。改定案はブエノスアイレスの緯度、南緯 35 度をイギリス艦艇が通過以降、イギリス艦艇は次のような行動が許されるという内容となった³⁸⁶。

「25 マイル以内に接近し敵意を明らかに示し確実に認識できたアルゼンチン艦艇、戦闘機および潜水艦に対する攻撃を許可する。アルゼンチンのどの部隊がイギリスの部隊を攻撃した場合、アルゼンチンのすべての部隊に対する攻撃を許可する。ただし商船に対する攻撃は禁止する。」

南緯 35 度より北のアルゼンチン艦艇に関しては、「挑発を避けること。しかし、・・・安全な通過を確保するために、十分決意を持ち侵略に対応する。このために、25 マイル以内に接近するアルゼンチン部隊を最小限の武力により攻撃できる³⁸⁷」というものであった。

³⁸³ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.232f.

³⁸⁴ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.233.

³⁸⁵ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.233.

³⁸⁶ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.233f.

³⁸⁷ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.234.

c 主要な指揮官

(a) 任務部隊司令部の司令官と参謀

当初「コーポレート作戦」の陸上兵力に関してフィールドハウスを補佐する者は明確に定められていなかった。海兵隊第3コマンド旅団を出発させて後、ジェレミー・ムーア海兵隊少将(53歳)が4月9日にプリマスからノースウッドに赴任して陸上部隊副司令官(Land Forces Deputy)になった。しかし、ムーアの役割は助言者であり、カーチス空軍中將軍が「コーポレート作戦」に投入された空軍兵力を指揮したように陸上兵力を直接指揮したわけではなかった³⁸⁸。4月2日の早朝、プリマスにあるコマンド司令部(Commando Forces Headquarters)のムーア海兵隊少将に第3コマンド旅団を派遣する準備命令が出され、4月2日から4月9日までの間、ムーアは海兵隊第3コマンド旅団の派遣責任者であった。空軍の作戦に関してフィールドハウスを補佐したのは空軍第18航空団のジョン・カーチス空軍中將軍であり、第18航空団はすべての洋上での航空作戦を統制する空軍の組織であり司令部をノースウッドに置いていた。

陸上部隊の派遣兵力は最終的に8個大隊規模の部隊と大きな部隊となった。海兵隊はこの規模の組織は保有しておらず、8個大隊のうち5個大隊は陸軍の大隊であったため陸軍から陸上軍の指揮官および幕僚が就く可能性があった³⁸⁹。しかし、海兵隊のムーア少将が、トンプソン海兵隊准将に替わりフォークランド諸島陸上軍(Land Forces Falkland Islands: LFFI)の指揮官に就いた。陸上部隊副司令官には陸軍のジョン・ウォーター(John Waters)准将が就いた。ムーアがノースウッドの司令部で就いていた陸上部隊副司令官の配置は、陸軍のリチャード・トラント(Lieutenant General Richard Trant)中將が引き継いだ。以後、ムーアと任務部隊司令部とのやりとりは、トラントを通じて行われるようになる。

当時、陸軍は予備の師団司令部はなく、ムーアの司令部は第3コマンド旅団を出発させた後余裕があった。第5歩兵旅団を提供した陸軍にはムーアがフォークランド諸島陸上軍の指揮官に就いたことに対し不満があった³⁹⁰。理由はすべてノースウッドの司令部を経由する必要があり、戦場の部隊を直接指揮できないことにあった。陸軍にとってフォークランド諸島での戦闘はイギリス陸軍が行ってきた戦闘と違っていた³⁹¹。

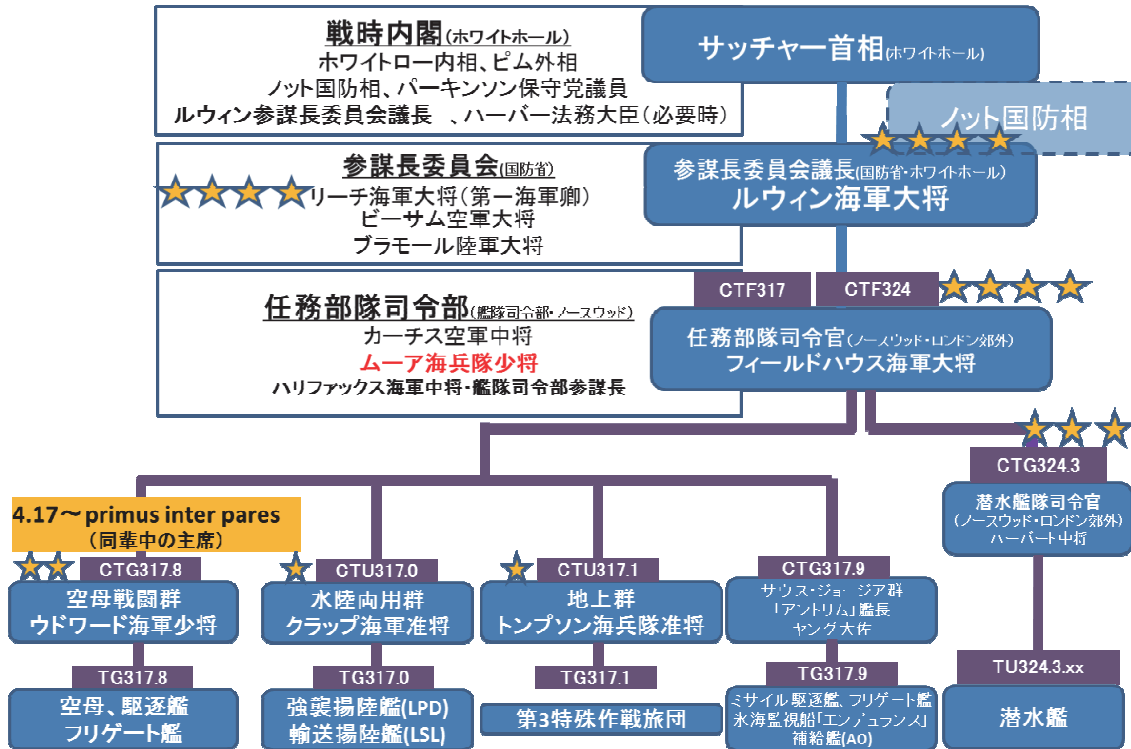
³⁸⁸ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.94.

³⁸⁹ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.180f.

³⁹⁰ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.181.

³⁹¹ Martin Middlebrook, *THE FALKLANDS WAR* (Pen & Sword Books Limited, 2012), p.181.

図第2 イギリスの指揮機構 (1982.4.10~5.19)



Douglas N. Hume, *The 1982 Falklands-Malvinas Case Study*などを基に作成

(b) 現場の指揮官

2隻の航空母艦を中心とする艦船からなる空母戦闘群の指揮官に就いたウッドワード海軍少将 (50歳) は潜水艦乗りである。ウッドワードはジブラルタル沖で第1艦隊の一部を率いて南大西洋に向かう途中に指揮官に指定され、ウッドワードの部隊は任務部隊の先遣隊から最終的に水陸両用作戦まで扱うことになる。空母の運用経験がなかったため、ウッドワードは、本国から出港した空母からなる主隊と合同した際に航空関係の将官と指揮官を交代させられる可能性があった。しかし、フィールドハウスは引き続きウッドワードに指揮を執らせることを強く望んだ。

空母戦闘群の指揮官候補として第3艦隊の指揮官のデレック・レップフェル(Derek Reffel)海軍少将、海軍航空司令部のエドワード・アンソン(Edward Anson)海軍少将がいた。ウッドワードは本国から航空作戦を補佐する幹部の派出を受けた。そして、少なくとも毎日は「ハーミーズ」および「インヴィンシブル」の艦長に助言を求めている³⁹²。

フォークランド諸島に橋頭堡を築くまでの陸上群の指揮官は海兵隊の准将トンプソン(47歳)であった。トンプソンは海兵隊第3コマンド旅団の指揮官であった。トンプソンは第3コマンド旅団の他に陸軍の2個空挺大隊および支援部隊の提供を受けた。

水陸両用群の指揮官は海軍のクラップ准将が就いた。クラップ(50歳)はかつてバッカニア/ブキャナー(Buccaneer)攻撃機の飛行中隊を指揮経験のある海軍のパイロットである。クラップは水陸両用作戦目的地域(Amphibious Objective Area : AOA)で兵員、武器および補給品などを揚陸艇またはヘリコプターで揚

³⁹² Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.95.

陸する計画・実行の責任者である。当時、記者はクラブに質問することも、クラブの役割に言及することすら認められなかった。クラブは「秘密の兵士」の一人であった³⁹³。

トンプソンおよびクラブは4月4日から数日間、ノースウッドの司令部で過ごしている。クラブと行動を共にするサウスビー＝テルユア海軍少佐は毎朝フィールドハウスにフォークランド諸島の説明を行った。サウスビー＝テルユア海軍少佐はフォークランド諸島での勤務経験があった。クラブはフィールドハウスに空母戦闘群と共に南下することを要望している。フィールドハウスは空母戦闘群が3つの群に分派されるので、ウッドワードの部隊が海戦を行うまでアセンション島にとどまるように言っている。トンプソンは経空脅威がある中での上陸は絶対に実施しないと断言していた。トンプソンにとって航空優勢の確保は第1の優先事項であった³⁹⁴。

(c) ノースウッドと現場の指揮官による会議

水陸両用群の旗艦「フィアレス」は4月17日の朝早く前進基地となったアセンション島沖に到着した。前日、空母戦闘群の旗艦「ハーミーズ」は前日到着していた。トンプソンおよびクラブはヘリコプターで「フィアレス」から「ハーミーズ」に乗艦した。任務部隊司令官のフィールドハウス、副司令官（空）カーチスおよび陸上部隊副司令官ムーアはイギリス本土から航空機でアセンション島に移動し、ヘリコプターで「ハーミーズ」に乗艦した。この日、初めて「コーポレート作戦」の主要な指揮官、参謀および幕僚がそろった会議が行われた。顔見知りだったのはフィールドハウスだけである³⁹⁵。会議は丸1日費やして行われたが、フィールドハウスはすでに重要な事項を決めていた。フィールドハウスは任務部隊を支える国民の支持の話から始め、国内の政治状況に関する不可欠な背景を説明した³⁹⁶。

そして、フィールドハウスは戦争の先延ばしはないということに基づいた計画を進めることを強く命じた。フィールドハウスの幕僚は、ここ数日間かけて用意した作戦のすべての側面について用意資料をすべて提示した。フィールドハウスたちは、ロンドンで行っていた戦略に関する議論を、今度は現場の指揮官ともう一度詳しく議論した³⁹⁷。

ウッドワードは、この日の会議を有益だと認めた。「心のなかを明かし意見を交換する必要性は多かった。初めて全体の計画および予定表が明らかになった」からである。予定表は明日の空母戦闘群のアセンション島出港から始まっていた。

この会議の前日、4月16日、ウッドワードはトンプソンおよびクラブに会うために「フィアレス」に出向いた³⁹⁸。翌日のフィールドハウスとの会議の準備を2人とするのが目的であった。この機会に、フォークランド諸島上陸作戦（「サットン作戦(Operation SUTTON)」）に対する3人の考え違いの原因を確認す

³⁹³ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.95.

³⁹⁴ Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands*, p.119.

³⁹⁵ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.98.

³⁹⁶ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.203.

³⁹⁷ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.203.

³⁹⁸ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.200.

る機会であったが、うまくいかなかった。このときクラブにはウッドワードに対し懸念があった。ウッドワードが考えている艦艇を囷にしてアルゼンチン本土のアルゼンチンの攻撃機を誘い出そうという考えにであった。「フィアレス」を使われることを心配していた。「フィアレス」はクラブおよびトンプソンにとって強襲揚陸に不可欠な旗艦であったためである³⁹⁹。

この日の議論に関する3人の回想は大きく異なっている⁴⁰⁰。ウッドワードは「私には議論は好意的だったが、2人は全く違う報告をした」と述べている。トンプソンは「ウッドワードのやり方は私のやり方にも、クラブのものとも一致しなかった」と報告し、クラブは信頼は崩れた。修復には長い時間がかかる」という報告をしていた。

d 第一海軍卿ヘンリー・リーチ大将の進言と任務部隊の編成

ノット国防相は3月31日夕刻早く、4月2日の午前早くに、アルゼンチンがフォークランド諸島に侵攻するという明確な意図を示す情報（通信傍受電報を暗号解読して得た情報⁴⁰¹）の説明を受けた。これまでの情勢判断を一変させる情報を受け、下院にあるサッチャーの部屋で会議が行われた。会議にはサッチャー首相、ノット国防相、保守党下院議員 Lord Privy Seal (閣議メンバー) のアトキンズ(Humphrey Atkins)、リチャード・ルース (Richard Luce) 外務次官、国防省および外務連邦省の事務次官が参加していた。そこに、最新情報に対する自分の評価を説明するために下院内でノット国防相を探し回っていた海軍参謀長ヘンリー・リーチ(Henry Leach)第一海軍卿が、サッチャーの許可を得て偶然出席することになった⁴⁰²。ルウィン参謀長委員会議長は出張中であった。

会議では、外務連邦省側が3隻目の原子力潜水艦の派出を執拗に求めていたが、ノットは追加の行動を起こすことに抵抗していた。2隻の原子力潜水艦はすでに行動を始めていた。ヘンリーはサッチャーに意見を求められ、アルゼンチン軍によりフォークランド諸島が占領されるのを効果的に抑止できず、フォークランド諸島は占領されると考える。奪回すべきかどうかを言う立場にはないが、あえて、強く奪回すべきと助言した。そして、そのために強力な水陸両用部隊を含む大規模な海軍任務部隊が必要であり、速やかに、任務部隊を編成すべきであり、十二分な兵力を準備していることを示すことがアルゼンチン軍に上陸を躊躇わせるかは疑問であるが、恐らく、今となつては、そのような措置はアルゼンチンがすでに決心したことを駆り立てることにはならないであろうと⁴⁰³。

サッチャーから任務部隊の兵力を具体的に問われ、リーチは「ハーミーズ」、「イントレピッド」（その時は予備艦隊）、稼働状態の駆逐艦およびフリゲート艦の大部分、イギリス艦隊補助部隊(Royal Fleet Auxiliary: RFA)の多数の艦艇、さらに多数の徴用船、そして陸軍の兵力の一部を編入した海兵隊第3コマ

³⁹⁹ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.202.

⁴⁰⁰ Freedman, *Official History Vol. II*, 2007, p.200.

⁴⁰¹ Martin Middlebrook, *The Falklands War, Pen & Sword Military*, 2012, p.65f.

⁴⁰² Lord Franks, *Falklands Islands Review* (HMSO 1983), p.67(col.233-235).

⁴⁰³ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London; Frank Cass, 2005), p.68f.

ンド旅団からなるであろうと説明している⁴⁰⁴。

そして、サッチャーに3隻目の原子力潜水艦の派出に関して問われたリーチは、昨日、ノット国防相に問われた際、派出に反対したが、最新の情報から可能な限り早く3隻目の原子力潜水艦を派出すべきであると答えている⁴⁰⁵。

航空機による上空援護に関して問われたリーチは、シー・ハリアーおよびハリアーにすべて依存することになるが、機数は十分ではないが、シー・ハリアーは性能が高く、アルゼンチン軍のものよりも上であると思う。すべての航空機を、訓練機も含めて作戦行動が可能な状態にすれば、少なくとも作戦地域の制空権を獲得するために作戦海域に入り次第、上陸前には弱体化させることができる。そして、リーチは作戦は相当な危険があることしながらも、すべてを考慮すれば、許容できる危険であり、次善の策はないと述べている⁴⁰⁶。

サッチャーは、シー・ハリアーの説明を受け、バッカニア(Buccaneer)およびファントム(Phantom)について質問した。リーチはバッカニアおよびファントムは、空母「アークロイヤル(HMS Ark Royal)」を退役させた際に、空軍の兵力になっており、両機種とも「インヴィンシブル」および「ハーミーズ」で運用できないことを説明したという。サッチャーは「アークロイヤル」は廃艦となっており、新しい「アークロイヤル」の完成は3年以上先であることを認識していなかったようである。

サッチャーは任務部隊編成するのに要する日数を質問した。リーチは民間商船の徴用は勅令が必要であること、商船の所在地が問題であり、さらに改造工事が必要となるが、「イントレピッド」は、正確な状態の確認が必要だか、48時間と答えている。また、フォークランド諸島までの所要日数も聞かれ3週間と答えている。そして、任務部隊を編成する準備は一般に知られず実施可能かと聞かれ、リーチはその規模から、直ぐに知られるでしょうと答えた。

そして、サッチャーは、もし、フォークランド諸島が侵略されたら、奪回はできるかとリーチに確認し、「できる」(「yes」)、「そうすべきである」とのリーチの返事に対しかみつくように、その理由を聞き返したという。リーチは、もし奪回しなければ、またはもし日和見的な態度をとり、完全な成功を達成しなければ、数カ月後には我々の言葉が影響力を失った別の国で生活することになると考えるから、と説明したという。

こうして会議では、リーチは3隻目の原子力潜水艦の派出と、指示があるまで出港はさせないがリーチの提示した基本線で任務部隊の編成準備を任せられた。会議終了後、リーチは国防省に戻り、必要な支持を発出し、ルウィン参謀長委員会議長の代理の空軍の参謀長に電話で会議の内容を説明した。ルウィン参謀長委員会議長は5カ国防衛取極め(the Five Power Defence Arrangements)の会合でニュージーランドを訪問中であった。

4月1日(木)夕刻からの、ダウニング街十番地の首相公邸でのサッチャー、キャリントン、ノットに

⁴⁰⁴ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.69.

⁴⁰⁵ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.69.

⁴⁰⁶ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.69.

よる話し合いでは、再度、あらゆる可能な選択肢が検討されたという。しかし、これまでに確認された外交的圧力を継続する以外に万能薬は見いだされなかった。部隊を緊急待機態勢に置くことが決められた。イギリスの港湾に集合する海軍任務部隊を 4 時間の予告で 48 時間以内に出港できる態勢にし、ジブラルタル沖で演習していた艦艇からなる部隊を南方に向かわせることが決められた。ジブラルタルから南方に向かう部隊は、本国で編成される主隊となる部隊と大西洋上で合流する予定であった⁴⁰⁷。

この会議にリーチも出席していた⁴⁰⁸。その際、リーチによればリーチとサッチャーとの間で次のような応酬があったという。フォークランド諸島のレックス・ハント(Rex Hunt)総督に対する指示内容が検討された。その内容はリーチにとって最悪の場合、客席から運転手に余計な指図をするようなものであり、いくら良くとも決まり文句の羅列のように映った。その気持ちを隠せなかったリーチはサッチャーに同意できない理由を聞かれ、リーチは、もし、私が作戦指揮官であれば、そのようなメッセージを受けれたら、その電報を直ちに反故箱に捨て、政府に対する信頼を失うでしょうと答えた。サッチャーにあなたならなんと申しますかと聞き返されたリーチは、「何も言わないでしょう」(「nothing」)、「そのような最後の段階では、私なら現場の指揮官に任せます」と答えたという⁴⁰⁹。

また、サッチャーはリーチにあなたがアルゼンチン艦隊の最高指揮官だとしたら、イギリスが任務部隊を派遣したらどんな対応をしますかと、食って掛かるように質問したという。「私なら帰港して港にどまります」と答えたリーチにサッチャーはその理由を聞いた。リーチは「私は、アルゼンチン海軍はイギリス艦艇の何隻かを破壊できるでしょうが、イギリス海軍は、アルゼンチン海軍すべの艦艇を撃沈するでしょう。もし、そうなれば、アルゼンチン海軍はその復興に何年も費やすことになりますから」と説明したという⁴¹⁰。

リーチはフィールドハウスを良く知っていたようである。フィールドハウスこそ危機に際してこれ以上の司令官は望めないというほどの全福の信頼を置いていた。リーチによれば、フィールドハウスはリーチの考えに完全に沿って思考をできる者でまで評価している⁴¹¹。

e その他 (イギリス任務部隊の使用した時間帯)

イギリスの任務部隊は世界標準時 (Z 時 : Zulu Time)、つまり「グリニッジ時間」を部隊の使用時間帯とした。4 月中旬にアセンション島を後にしたウッドワードはフォークランド諸島周辺海域に着くまでに 3 回は時刻帯を変更する必要があった。空母戦闘群の指揮官のウッドワード海軍少将は、任務部隊は世界標準時を使用することを進言、任務部隊の司令官フィールドハウス海軍大將は錯誤防止のため広範な南大西洋における作戦のすべてにグリニッジ時間を使用することを決めた。

ロンドンでは 3 月 28 日から通常より 1 時間進めた夏時間であったため、ロンドンの時間帯だと世界標準

⁴⁰⁷ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.71.

⁴⁰⁸ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.71.

⁴⁰⁹ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.71.

⁴¹⁰ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.72.

⁴¹¹ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on*, p.72.

時よりも1時間進んだ時間帯(+1h)となっており、フォークランド諸島はワシントンと同じ時間帯であり世界標準時より4時間遅れた時間帯(-4h)が使用されていたが、フォークランド諸島を占領中のアルゼンチン軍はアルゼンチン本土と同じ時間帯である世界標準時より3時間遅い(-3h)時間帯を島民に使用させていた。当時の南大西洋の日没の平均は世界標準ときで2015Z時ごろであり、日出の平均は世界標準ときで1030Z時ごろであった。フォークランドの時間帯だと日没は午後4時15分ごろ、日出は6時30分ごろである。

4 数字の時刻の後の「Z」は「Zulu time」(ズルー・タイム)の略であり、イギリス軍が軍事通信で通常使用している時間識別用語であり、グリニッジ時間(世界標準時)で表示していることを意味する。ウッドワードはアセンション島、フォークランド諸島、本国で異なる時間帯を使用すれば錯誤が起きること考え、本国のイギリス軍の最高司令部が使用しているグリニッジ時間の使用を進言した。ウッドワードは、グリニッジ時間を使用したことによる副次的効果を回想している。本国の戦時内閣のメンバーおよび司令部だけでなく現場のイギリス軍は同じ時間空間(日課)を共有でき、アルゼンチンの時間帯がグリニッジ時間より3時間遅れていることから、アルゼンチンより3時間も早い行動(日課)を送ることができた⁴¹²。一方で、上陸群と陸上軍の指揮官を務めたトンプソン海兵隊准将は、今になっても(1985年)任務部隊が世界標準時を使用した理由は理解できないと回想している⁴¹³。

第2項 イギリス軍の統合に関する歴史的な背景

イギリスでは、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期に参謀長委員会(Chiefs of Staff Committee)を設けた。各軍の長から構成され、そのなかの1人が議長を務めた。各軍にはそれぞれ大臣がおり、内閣においてそれぞれの大臣が各軍を代表していた。世界規模で、各軍の地域軍司令官(Commanders-in-chief)と共に各軍の指揮系統は並置の状態であった。この当時、統合作戦の訓練を行うことはあったが、水陸両用作戦にかかわる装備について特に進展はなかった⁴¹⁴。

第二次世界大戦が勃発した際、イギリスの大戦略は戦時内閣(War Cabinet)が、軍事戦略は参謀本部が担った。新設の国防相を兼任したチャーチルの下、3軍それぞれの指揮系統は維持されながら、3軍は緊密に協力した。例えば、イギリス海軍のウェスタンアプローチ管区(Western Approaches Command)およびイギリス空軍の沿岸兵団第15群は1941年から、イングランド北西部のリバプールの同じ建物に設けられた⁴¹⁵。イギリスにおいて明確に統合指揮官(Joint Commander)と呼べるものは、1940年10月に指定された、極東地域における陸軍および空軍の2軍の地域軍司令官である。しかし、海軍はこの指揮下

⁴¹² Freedman, *Official History Vol. II, 2007*, p.xxxixf., Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Day*, p.2f., Martin Middlebrook, *The Falklands War*, Pen & Sword Military, p.101.

⁴¹³ Julian Thompson, *No Picnic: 3 Commando Brigade in the South Atlantic: 1982* (London: Leo Cooper in association with Secker & Warburg Ltd, 2001), GLOSSARY.

⁴¹⁴ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.334.

⁴¹⁵ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.334.

には入らなかった⁴¹⁶。第二次世界大戦では、初めて統連合司令部 (joint and combined command) (アメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリア 5 カ国) が設立されている⁴¹⁷。

第二次世界大戦中、イギリス軍の参謀本部 (Chiefs of Staff) は、統合指揮官が強力な中央集権化した指揮権を行使するより、各指揮官の調整を行うことを好んでいたが、アメリカからの圧力により徐々に統連合軍の中に入った⁴¹⁸。統一された指揮は最も高い地域段階では存在したが、作戦段階では並置された指揮系統による協力が継続した⁴¹⁹。

第二次世界大戦後、イギリスは並置の指揮系統に戻った。指揮官はイギリス地域防衛調整委員会 (regional British Defence Committees, BDCC) の構成員となり、スエズ遠征の場合のような特別な作戦が行われる際に、統合指揮官が任命された⁴²⁰。

1960年代以降、統合指揮官が再度設けられるようになった。統合の制度の信奉者であった統合参謀総長マウントバッテン (Mountbatten) による強い働きによるものであった。マウントバッテンが統合制度を進めた背景には、マウントバッテン自身が、1943年から1946年の間、南東アジアにおける最高連合司令官を務めたときの経験があった⁴²¹。

この結果、1963年からのインドネシア対立 (Indonesian Confrontation) では4つ星の司令官に対してのみ責任を負う、2つ星の統合軍作戦指揮官 (Joint force two-star Director of Operations) により戦った。4つ星の司令官は参謀本部に対して直接責任を負った⁴²²。

しかし、このような世界規模の指揮体系は、作戦からの圧力というよりは、財政面からの圧力により長続きせず、1970年代には解体した。これは、イギリスがイギリスの兵力を NATO における任務に専ら集中するようになった結果であった。イギリス軍の指揮統制 (C2) が NATO に組み込まれるのが増え、統合指揮官の指揮系統が不要となったためである⁴²³。

1960年代に統合指揮に関する組織は、国防省内の改革の影響を受けた。その改革により、1964年、最終的に各軍の大臣は国防省内に包括されることとなった。1955年から、国防参謀長 (Chief of Defence Staff,

⁴¹⁶ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.334.

⁴¹⁷ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.334.

⁴¹⁸ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴¹⁹ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴²⁰ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴²¹ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴²² Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴²³ Vice Admiral Sir Jonathon Band, "British High Command during and after the Falklands Campaign," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.30f. Commodore Tim Laurence and Stephen Prince, "The Continuing Transformation of Britain's Maritime Forces Part I :The Historical Context, " *RUSI Journal*, April 2003, p.45f.

CDS)が設けられ、参謀本部(Chiefs of Staff)の長を務めるようになっていた⁴²⁴。

事実、フォークランド戦争が生じた1982年の時点において、2、3の守備隊を除きすべてのイギリス軍は、国内における各軍単位の指揮系統に属し、NATOの指揮系統を兼ねていた。イギリス軍の焦点および配置は、次第に、連合軍の地域シナリオにおける優先事項に向けられるようになった⁴²⁵。

つまり、イギリス軍の当時の作戦上の統合(integration)の状況は、イギリス軍の各軍種の統合(combine)というより、何よりもまずNATO同盟国の海、陸、空軍と連合(combine)されていた状態であった⁴²⁶。

NATOとして行動しない緊急事態が生じた際は、最も適切と思われる単一の軍種の司令部が対応することが予想されていた。つまり、あらかじめ常設の統合司令官を設けず、状況に応じて対応するが前提となっていた。兵力に関しては、作戦は連合(combined)または小規模な作戦になるという仮定の下、通常、NATOの兵力に振り向けられている兵力を利用することとされていた⁴²⁷。

この方向性を強めたのが、1981年の国防政策見直し「The Way Forward」であった⁴²⁸。この国防政策見直しは幾つかの幕僚教育訓練関係の組織の閉鎖などの必要性が記述されており⁴²⁹、唯一高度な統合作戦(joint warfare)訓練のための施設である統合軍国防大学(Joint Services Defence College)などが対象と考えられていた⁴³⁰。また、2隻の強襲揚陸艦、「イントレピッド」を1982年に「フィアレス」は1984年に退役させる予定とされ、代替艦の必要はないとされていた⁴³¹。

なお、この国防政策見直しは特に氷海警備船エンデュアランスの退役などに関する事項などによりアルゼンチン首脳はフォークランド諸島への侵攻意志を強めたと一般に評価されている。

1981年の国防政策見直し「The Way Forward」は、見直しの過程で、イギリスがフォークランド戦争を遂行していくうえで大きな影響を及ぼすこととなった副産物を生んでいた⁴³²。見直し当時も参謀長委員会議長であったルウィン参謀長委員会議長は、国防政策見直し「The Way Forward」の見直しの過程で、自分の役職である参謀長委員会議長の役割に関する改革を推進した。ルウィン参謀長委員会議長は、当時の参謀長委員会議長が名前だけの地位であることに不満を覚えていた。海軍大将テレンス・ルウィンにと

⁴²⁴ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴²⁵ Vice Admiral Sir Jonathon Band, "British High Command during and after the Falklands Campaign," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.31.

⁴²⁶ Andrew Doman, Mike Lawrence Smith, Matthew Uttley, "Jointery and Combined Operations in an Expeditionary Era: Defining the Issues," *Defense Analysis*, Vol.14, No1.p.2.

⁴²⁷ Vice Admiral Sir Jonathon Band, "British High Command during and after the Falklands Campaign," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.31.

⁴²⁸ Ministry of Defence, *The United Kingdom Defence Programme: The Way Forward*, Cmnd 8288 (London: HMSO, 1981).

⁴²⁹ Ministry of Defence, *The United Kingdom Defence Programme: The Way Forward*, Cmnd 8288 (London: HMSO, 1981),para41.

⁴³⁰ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴³¹ Ministry of Defence, *The United Kingdom Defence Programme: The Way Forward*, Cmnd 8288 (London: HMSO, 1981),p.10.

⁴³² Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

って参謀長委員会議長という役職が実質的に参謀長委員会の代理人としてしか行動できないことが不満であった⁴³³。ルウィン参謀長委員会議長は参謀長委員会議長の役割を強化する一連の改革を企てた。この結果、参謀長委員会議長は、参謀本部（Chiefs of Staff）の長として、集団的責任に制限されず、政府の最先任の軍事面の助言者となった。そして、各軍の参謀長は集団的な責任態勢における支えというより、参謀長委員会議長に対する各軍の最先任の助言者となった⁴³⁴。

こうして、1982年1月、大戦略段階と軍事戦略段階の間の直接的なつながりは参謀本部（Chiefs of Staff）から参謀長委員会議長に移っていた。

ただし、参謀本部（Chiefs of Staff）は首相に直接接見するという最も重要な権利は維持されたままであり、指揮系統内における集団的な責任は内閣の段階に制限されるとこととなった⁴³⁵。

このような、参謀長委員会議長の役割の強化に伴い、参謀長委員会議長を補佐する組織、統合指揮官、およびその司令部（幕僚）が必要になる。しかし、いわゆる域外作戦（Out of Area Operations）を指揮するために、イギリス本土に統合司令部の設立はなかなか実現しなかった⁴³⁶。

しかし、国防省の組織改革という別の方面からの動きがあった⁴³⁷。いわゆる、ヘセルティン（Heseltine）による国防政策見直し（Cmnd.9315）である。ヘセルティンによる国防政策見直しは、次のように述べている⁴³⁸。

「我が国の現代戦の経験、つまり最近あったフォークランド戦争で、軍隊が一緒に戦うための装備、訓練の必要性がますます明らかになった。このため、今回の国防政策見直しの核心部分は、各軍の将来の政策はますます共同防衛プログラムに適合しなければならないというものである」

このヘセルティンの見直しは、政策、兵力構築、資源分配に責任ある中央の幕僚を十分に集約するという道筋に沿った重大な進展であり、この方向性は、1990年のPROSPECT、1993年の「国防費用研究」（Defence Cost Study: DCS）、1997・98年の「戦略国防政策見直し」（Strategic Defence Review: SDR）で継続、発展した⁴³⁹。

⁴³³ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴³⁴ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335.

⁴³⁵ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.335f.

⁴³⁶ Sir Roger Jackling, "The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London; Frank Cass, 2005), p.247.

⁴³⁷ Sir Roger Jackling, "The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London; Frank Cass, 2005), p.247.

⁴³⁸ Sir Roger Jackling, "The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy," Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London; Frank Cass, 2005), p.247.

⁴³⁹ Sir Roger Jackling, "The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy," Stephen Badsey, Rob Havers and

一方、作戦に関する統合司令部および統合指揮官および幕僚の訓練という面における機構改革の進展は遅々としたものであった⁴⁴⁰。

1994年に、常設統合司令部（Permanent Joint Head Quarter, PJHQ）の設立が決められたが、それは、1993年の「国防費用研究」のなかで提唱されたものである。この統合司令部の設立はフォークランド戦争から12年も経過しており、フォークランド戦争の結果と評価しにくいであろう⁴⁴¹。

「コーポレート作戦」の成功は、常設の統合司令部の設立への抵抗を強化したとする指摘がある⁴⁴²。理由は次のようなものである。

「疑いなく、各軍は、NATO以外の作戦では、最もふさわしいと思われる3軍のうちの1つの作戦司令部（海軍では艦隊司令部、陸軍では陸上戦司令部、空軍では打撃兵団司令部）を指定することで、効果的な指揮ができると主張する傾向がある。1991年のグランビー（Granby）作戦では空軍の打撃群の司令官がその役割を果たし、1997年までのバルカンでは陸軍の司令官の指揮官がその役割を果たしている。各軍は、この期間に、日々の業務および隷下部隊の訓練と同じく、実際の作戦に責任を持つ単一の軍の司令部が有効であり士気も上がり重要であるという信念が強く残った。結局、冷戦が終焉し、NATOの指揮機構がもはや、排他的で大きな作戦のための枠組みでなくなってから、常設統合軍司令部（Permanent Joint Head Quarter: PJHQ）は設立されるようになった。

常設統合司令部はノースウッドに司令部を置く3星の階級の指揮官を長とする組織であり、イギリス軍内の統合作戦の計画および実施だけでなく、多国間との連合作戦（combined and multi-national operations）の計画および実施を主な任務としている。

また、1996年にはイギリス軍は統合緊急展開部隊（Joint Rapid Deployment Force）も創設した。海兵隊の奇襲部隊など3軍の兵力で構成された即応態勢の高い部隊であり、常設統合司令部の指揮下に入る。

第3項 水陸両用作戦における統合の状況

フォークランド戦争におけるイギリス軍の軍事作戦を統合作戦の観点からみると幾つかの特徴を指摘できる⁴⁴³。フォークランド戦争におけるイギリスの作戦（「コーポレート作戦」）が航空力では輸送しきれな

Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.248.

⁴⁴⁰ Sir Roger Jackling, “The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy,” Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.248.

⁴⁴¹ Sir Roger Jackling, “The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy,” Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.248.

⁴⁴² Sir Roger Jackling, “The Impact of the Falklands Conflict on defence Policy,” Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.248.

⁴⁴³ 当時、イギリス軍の統合作戦に関する定義は曖昧であった。イギリスでは、統合 (joint) 作戦は、連合 (combined) 作戦と述べられていた。同盟または多国間の作戦も連合 (combined) 作戦と述べられていた。Stephen Prince, “British Command and Control in the Falklands Campaign”, *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.346. Andrew Doman, Mike Lawrence Smith, Matthew Uttley, “Jointery and Combined Operations in an Expeditionary Era: Defining the Issues,” *Defense Analysis*, Vol.14, No1.p.3-5.

い遠征作戦であったことである。そして、空母戦群の指揮官を務めたウッドワードが、フォークランド戦争に関し、1956年のスエズにおける作戦以来行ったことない規模の高度で複雑な水陸両用作戦は非常に成功であったと回想しているように⁴⁴⁴、フォークランド戦争は水陸両用作戦（Amphibious Operations）を必要とした作戦（「サットン作戦」）からくる特徴である。

イギリス本土から 8,000 マイルに位置するフォークランド諸島への兵力等の輸送を不可欠とする遠征は海軍抜きでは成り立たない作戦であった。また、海軍の上級指揮官には水陸両用作戦における過去の経験から、水陸両用作戦は海軍にまかせるべきものと認識があった⁴⁴⁵。これらが海軍を「コーポレート作戦」の推進役にしたといえる。ただ、「コーポレート作戦」は、海軍だけでも成り立つ作戦ではなく、その目的から純粋な陸上戦闘となることはなく、航空兵力も含めた 3 軍種が統合（combined）されてこそ目的を達成できる作戦であった。

水陸両用作戦という作戦の特質からの特徴であるが、水陸両用作戦は次の 5 つの独自の方法をもつ構成要素に分解できるとされる⁴⁴⁶。指揮系統、艦砲射撃、航空支援、陸上行動、海岸確保および兵站である。なお、フォークランド戦争の場合、フォークランド諸島の敵情把握などにおいて、海軍および陸軍の特殊部隊は大きな成果を上げている。

統合作戦が「2 つの軍種以上の兵力を含む作戦」⁴⁴⁷なら、水陸両用作戦は必然的に各軍種の兵力の統合を必要とする統合作戦である。特に、ヘリコプターなどの航空兵力の活用が作戦の帰趨に大きな影響を与えたといっている。

上陸の際に海上兵力と陸上兵力との間の指揮系統の分断という問題は、上陸群に編入される陸軍は別として海兵隊は海軍の部隊であるので、海上兵力と上陸兵力の主力である海兵隊と関係は論理的には統合関係ではなかった。しかし、「コーポレート作戦」における 3 名の指揮官、水陸両用群指揮官のクラブ海軍准将と上陸群指揮官のトンプソン海兵隊准将は、空母戦群指揮官だったウッドワードを戦後、かなり批判している。

ウッドワードによれば、クラブの批判は指揮系統に関するクラブの認識によるものである。また、トンプソンからの批判は、4 月中旬に、アセンション島でフィールドハウス以下、「コーポレート作戦」の主要な指揮官、幕僚が集まって行われた会議における、トンプソンの認識によるものであり、それら原因は、誤解によるものである⁴⁴⁸。

⁴⁴⁴ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxxvii.

⁴⁴⁵ Michael Clapp, Ewen Southby-Tailyour, *Amphibious Assault Falklands: The Battle of San Carlos Water* (Barnsley, South Yorkshire; Pen & Sword Military, 2007, first published in 1996), p.26.

⁴⁴⁶ 野中郁次郎『アメリカ海兵隊 - 非営利型組織の自己革新』（中央公論社、1995）36 頁。また、水陸両用作戦は六段階から成り立っているという。①計画段階、②船積段階、③予行演習、④海上移動、⑤強襲上陸、⑥目的地の確保である。（平間洋一「現代の海上戦力」防衛大学校・防衛学研究会編『軍事学入門』（かや書房、1999）190 頁）

⁴⁴⁷ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.333.

⁴⁴⁸ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), p.xxvi.

空母戦闘群指揮官であったウッドワードにとって、クラブ、トンプソンの考えは思いがけないものであったようである。また、ウッドワード少将は回顧録で、作戦はイギリス本土および南大西洋に派遣されたすべての関係者にとって初めてのことであったが、フォークランド戦争の指揮系統は十分に良く機能したと結論づけている⁴⁴⁹。

トンプソン海兵隊准将は水陸両用作戦において、イギリス海軍は、護衛、掃海、上陸艇、支援ヘリコプター、組織的航空攻撃、防空、海上輸送（商船海軍 (Merchant Navy) / 徴用商船 (Ships Taken Up From Trade: STUFT) により増強される。) の兵力を提供するとしている。支援ヘリコプター、組織的航空攻撃、防空はイギリス空軍(RAF)の支援受けると述べている⁴⁵⁰。どのような上陸作戦においても、上陸が行われる前に、海上および航空戦闘が必要であり、上陸中も引き続き必要とされるかもしれない。上陸後、かなりの間、上陸部隊は敵の攻撃に脆弱であり、不可欠な装備品が不足するかもしれない。このような状況において、水陸両用作戦の全体の指揮は自然と海軍士官の責任になる。

しかし、水陸両用作戦の計画策定は純粋に海軍の事情で作成できない。海軍が主導することになるが、計画の策定段階において、上陸部隊の指揮官と海軍部隊の指揮官は階級上同等であり、同レベルの発言権を有するものである。水陸両用作戦における責任は、上陸部隊の指揮官が上陸した部隊が橋頭堡の安全を確保し、上陸部隊が十分な兵力数になり、上陸部隊指揮官が通信を設定し、戦闘にかかわる補給品を十分に保有し、そして独自に戦争を行う準備ができきるまで、海軍の責任である。そして、このような態勢となった時に、上陸部隊との指揮関係は切れる。いわゆる、陸上の部隊への作戦指揮権の移転 (chopped ashore) である。 (“Chop” とは、“change of operational control” の略である。)

上陸部隊の指揮官に水陸両用群の支援ヘリコプター、さらに上陸艇などの指揮権を上陸群の指揮下に移す。この段階になると水陸両用群は補充のための行動または他の場所で作戦を行うのも自由である。「コーポレート作戦」ではサン・カルロス湾にとどまり、師団規模の司令部および第5歩兵旅団を上陸させ、司令部および第5師団のスタンレーへの前進およびスタンレーにおける戦闘の支援を行った。

任務部隊の指揮構造は次のような変遷を経ている⁴⁵¹。

ノースウッドの任務部隊指揮官が最初に正式に示された部隊編成は、3つの任務部隊 (task unit) は同じレベルであり、空母戦闘群指揮官のウッドワード少将は任務群の指揮官にも指名され、各任務部隊 (task unit) は、ウッドワード少将の直属となっていた。

これは、4月10日から部隊編成が変更される。この部隊編成によれば、新たに加わったサウス・ジョージア派遣群を含め4名の任務群の指揮官は直属し、各指揮官が直接ノースウッドの任務部隊指揮官に報告するようになっていた。後日、部隊編成を説明した通信文の中で、ウッドワードを南大西洋における先任任

⁴⁴⁹ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxxii.

⁴⁵⁰ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.85f.

⁴⁵¹ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxxiii.

務部隊指揮官 (Senior Task Group Commander) と表現していた。ただし、先任任務部隊指揮官の意味を正確に定義されていなかった⁴⁵²。

また、ウッドワードは、艦隊司令官の幕僚、個人的にはフィールドハウスからも、時々、ウッドワードを、ジェレミー・ムーア海兵隊少将が上陸し (5 月下旬)、フォークランド諸島を離れるまで (6 月下旬) の間、前線地域の指揮官 (front-line Area Commander) として扱ったと述べている⁴⁵³。実際、ある段階では、フィールドハウスは個人的に、ウッドワードに陸に上がり上陸群指揮官に橋頭堡から前進するに命じるように言っていたという。ウッドワードはフィールドハウスに、そのようなことは自分の能力および権限を超えていると伝え断ったことを回顧録で紹介している⁴⁵⁴。

このように指揮関係を変更しても、トンプソンおよびクラップは地域全体の指揮官の不在に不満であった。その理由をトンプソンは、2 人が対面による指揮の信者であると説明している⁴⁵⁵。

さらに、トンプソンによれば、この任務編成からクラップとトンプソンとの関係が不明確だったと指摘している。NATO のやり方で、上陸部隊との指揮が切れるまで、水陸両用戦の指揮官が上陸を主導することで、トンプソンとクラップは合意していたという。2 人とも強襲揚陸艦「フィアレス」に乗艦しており、食事を共にし、状況説明を共有し、お互いを幕僚として多くの時間を共に過ごし、馬が合った。しかし、指揮に関しては個性の働きに頼ったと述べている⁴⁵⁶。

ウッドワードは、上陸部隊がサン・カルロスに上陸するために最終的接近開始以降の状況を次のように説明している。ウッドワードの最も重要な任務は両用戦群指揮官および上陸群指揮官が必要とするものを何でも提供することであった。しかし、ウッドワードの空母戦闘群は同時にフォークランド諸島地域全体の、陸、海および空の優勢を確保することが最も重要な任務であり、実際、ウッドワードの空母戦闘群はサン・カルロスに陸上軍および橋頭堡から前進する部隊の最も重大な盾であったと説明している。そして、ウッドワードは、明確な自己の責任内で、出来得る最善で必要と思われることは何でもするように努力し、適切に連絡をとるように努力したとしている。

また、ウッドワードは、通常、衛星保全電話 (国防省保全交話装置 (DSSS: Defence Secure Speech System) で、クラップとの重要かつ必要な 2 人の交話内容を確認のため電信文にして関係者に配布している。そして、それは、むせぶアヒルのような機械 (DSSS) で互いに正確に理解した内容の照合のためであった。

サン・カルロスへの上陸作戦計画の大綱 (「サットン作戦」) でウッドワードは連合任務部隊指揮官 (The

⁴⁵² Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxix.

⁴⁵³ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxix.

⁴⁵⁴ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxix.

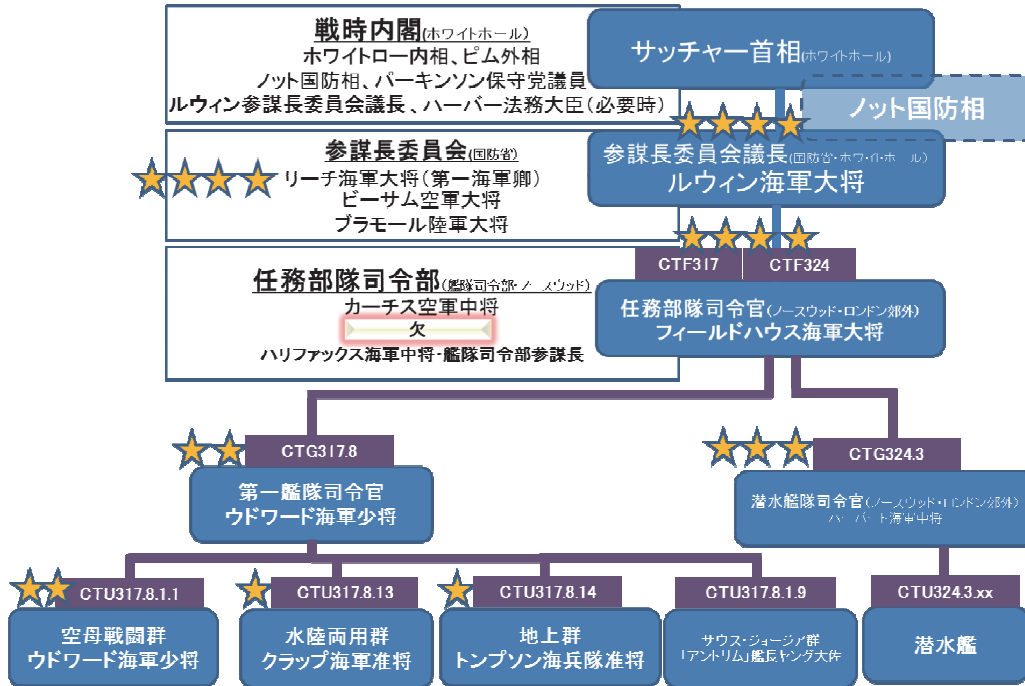
⁴⁵⁵ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.86.

⁴⁵⁶ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.87.

Commander combined Task Force) とされていた⁴⁵⁷。

この指揮系統は後に変更されるが、4月2日に発せられた指揮構造は、多くの関係者の心に、特にロンドンのロンドンのホワイトホール（官庁街）から戦争を観る人の意識に根付いたようだと言われている⁴⁵⁸。

図第3 イギリスの指揮機構（1982.4.2～4.9）



Douglas N. Hime, *The 1982 Falklands-Malvinas Case Study*などを基に作成

第4項 任務群の指揮官の間の論争

イギリスのフォークランド戦争の公式戦史の著者であるローレンス・フリードマンは、この主要な任務群の指揮官を務めた3者の論争を改訂版で取り上げて整理している⁴⁵⁹。公式戦史によれば、フォークランド戦争の軍事作戦の特徴が作戦指導および指揮関係を方向付けたとしている。フォークランド戦争における軍事作戦の特徴として次を挙げている⁴⁶⁰。

- ・当時の主要な軍事作戦は、実戦で試されていない装備品およびコンセプトによらなければならず、実験的であった。
- ・第二次世界大戦の経験者は上級指揮官だけであり、ほとんどの者は低強度作戦の経験

⁴⁵⁷ Admiral Sandy Woodward with Patrick Robinson, *One Hundred Days: The Memoirs of the Falklands Battle Group Commander* (Harper Press, 2012, first published in 1992), xxix.

⁴⁵⁸ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.86.

⁴⁵⁹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition, Vol. II*, (Routledge 2007), xxix-xxxii.

⁴⁶⁰ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition, Vol. II*, (Routledge 2007), xxix-xxxii.

しかなかった。

- ・緊急事態作戦計画が用意されている作戦はあったが、フォークランドに関する緊急事態作戦計画はなかった。
- ・軍事的な分析は不十分で、作戦の困難さ、無謀さを強調することとなっていた。
- ・アルゼンチンが占領した後、フォークランド諸島を奪回するうえで実際に必要な作戦要素として、当初、イギリス軍の指揮官が理解したのは、全く異なる文脈によるものであった。つまり、ワルシャワ軍との戦闘では、海軍は誘導方式ではない爆弾および機銃による航空機からの直接攻撃よりも、開放された海での潜水艦および空対艦ミサイルに備える必要があった。水陸両用作戦に関しては、NATO 諸国に対する増強という文脈の中で、友好国が護衛および航空機による上空掩護（エア・カバー）、そして沿岸の戦闘群からというよりむしろ、海岸地域からの輸送の提供が可能な支援国の存在を当然の前提としていた。
- ・当時、統合司令部はなく、空、陸に関する助言は、最西端のロンドン特別区（London borough）に位置するノースウッド（Northwood）の海軍の司令部に集められた。

個々の責任範囲を定めるうえで従うべき指揮手順。特に水陸両用作戦（amphibious landing）の指揮（conduct）に関する指揮手順は存在していた。しかし、すべての関係者がその指揮手順を認識していたようには見えなかった。それぞれの軍種の種々の部門はそれぞれ独自の文化をもち、よそのところでは常に正しく理解されることのないと思われる期待をそれぞれが持っていた。

例えば、潜水艦乗であれば戦術的な決定の際、大半の場合、自分で工夫して決めるであろう。それは、上級司令部との通信連絡の問題からである。このことは、任務部隊司令官であったフィールドハウスと空母戦闘群指揮官のウッドワードの2人が、他の者には不明瞭と思える指揮構造に満足していた理由を説明する手助けになる⁴⁶¹。

「コーポレート作戦」における主要な指揮官同士に面識はなく、知り合う機会はほとんどなかった。指揮官同士の意見の相違を検討する機会も、通常の会議で一緒に計画を十分に考える機会もなかった。一旦、別々の任務群（task group）として独立した後は、各指揮官は日々の指揮の責任と自分たち自身の特殊な次の段階の特別な任務を同時に行うようになったため、おとなる場所で直面している他の指揮官の特有な問題を正しく理解するのが一層困難になっていた。

国防省保全交話装置（DSSS: Defence Secure Speech System）が十分とはいえ、この装置で交わされた口頭によるやりとりは、意味を不明確にすることが多くあり、同時に何人もの人と交話ができず、会議

⁴⁶¹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition, Vol. II*, (Routledge 2007), xxx.

呼び出しができる装置ではなかった⁴⁶²。

例えば、ウッドワードとクラブは、それぞれが同じ問題を個々に、お互いに気づかれることなく、ロンドンのノースウッドの艦隊司令部にいる任務部隊全般の指揮官フィールドハウスと交話できた。

ウッドワードが率いた空母戦闘群の兵力は、最新の通信装置を装備していたが、一方、クラブが率いた水陸両用群の兵力はそのような最新の通信装置を装備していなかった。

クラブが座乗し旗艦とした強襲揚陸艦「フィアレス」にはある程度最新の衛星通信装置を装備していたが、クラブはその装置を信頼していなかった。またクラブの隷下の大半の艦艇、特にイギリス艦隊補助部隊(RFA)および商船のような艦艇の通信装置は極めてごく基本的な装置しか搭載していなかった⁴⁶³。

艦艇と上陸した部隊間の通信にも問題があり、上陸群指揮官のトンプソンが橋頭堡の部隊に合流後、それまで、「フィアレス」に共に乗艦し、うまくやっていた水陸両用群のクラブとトンプソンの間にも障害を生じるようになった。

空母戦闘群指揮官のウッドワードは指揮の範囲が地理的に拡大するに伴う数多くの緊急の要求に関するやりとりをたずさわるところになり、一方、クラブは、自分の受け持たなければならない水陸両用戦区域 (Amphibious Operation Area: AOA) 内の水陸両用群の艦艇に対する危険に対し集中するようになっていた。

ムーア海兵隊少将が上陸作戦を指揮するためにフォークランド諸島に到着した際、また違う問題が表れた。クラブおよびムーアは共に水陸両用群の旗艦強襲揚陸艦「フィアレス」に乗艦し、通常の個人的な接触があったにもかかわらず、クラブはムーアが他の上陸部隊の指揮官と交わした議論に加わっていない⁴⁶⁴。クラブはムーアを支援しなければならなかったのにである。同時に、ムーアは、ロンドンにおける最新の広範な情報を提供した。

以上のようなことを背景から、各級指揮官の関係が時々、厄介な問題になったのは、驚きでも、実際珍しくもない。

空母戦闘群の責任者であったウッドワードと上陸作戦に備えているトンプソンおよびクラブとの間の十分知られている対立は、彼らの個性の衝突または正規の指揮構造と同じ程度に、主に彼ら自身の状況認識によるものであった。指揮関係における重大な曖昧さは、水陸両用作戦の責任者であるクラブと上陸部隊の責任者のトンプソンとの関係に影響を及ぼしていた⁴⁶⁵。

ウッドワードは他の2人より先任であり、当初の指揮関係ではウッドワードは南大西洋に向かう3つの任務群のすべての責任者となっていた。ウッドワードの指揮下の兵力の地理的な広がりとは3つの任務群の

⁴⁶² Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxi.

⁴⁶³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxi.

⁴⁶⁴ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxi.

⁴⁶⁵ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxi.

任務が全く異なっていることに関し懸念があった。特に、サウスジョージア島の奪回を目的とする新たな任務群が編成された後、その懸念は強まっている。クラップは任務部隊指揮官のフィールドハウスとの直接関係を持つ必要があると信じていた。フィールドハウスは同意し、4月10日までには、4つの任務群の指揮官が任務部隊司令官フィールドハウスに直属する新たな指揮関係が実施された⁴⁶⁶。

しかし、ウッドワードはその時、曖昧な状態を引き起こす「同輩中の主席者(primus inter pares)」にされていた。ウッドワードが公然とより責任者になる状況が見込まれていたためである。フィールドハウスの幕僚は、ウッドワードは調整役の上位者となる必要があると考えたと思われる。特に護衛のような共用兵力に関して、ウッドワードが自己の主要な兵力を守るができることを明確にするためである。その中で、何よりも空母を守ることが重大と考えられた。それは、もし、2隻の空母のうち1隻でも失えば、作戦も失うことになると考えたためである⁴⁶⁷。

以上のような方法は、クラップおよびトンプソンの責任と思える事項に関してウッドワードの立場に関し疑問が生じていた⁴⁶⁸。それは、フォークランド諸島への上陸場所を選定するような場合であった。まだ、ウッドワードにとっても、フォークランド諸島における状況は関心事であった。上陸作戦を成功させた後も、長期間にわたり航空による支援を持続するうえでウッドワードの能力に直接関係があったためである。さらに、ウッドワードの広範な責任の範囲および上陸作戦前にアルゼンチン軍と交戦の責任者であったという事実がある。以上の理由から任務部隊司令官フィールドハウスは空母戦闘群の指揮官であったウッドワードを最先任として扱おうとした。

南大西洋における作戦に従事した者が自分たちで組織図を作成したのは疑問の余地はない。それは自分たちが誰に話し合う必要があるのかを忘れないようにするためであった。しかし、任務部隊司令部は司令部が作成した詳細な組織図を部隊に送らなかった。6月上旬にノースウッドの司令部で使用されたものがあるが、それは広く配布されなかったようである。

公式戦史によれば、種々の問題の原因は、指揮関係の曖昧さというより、不十分な通信の問題が原因となったというのが事実である⁴⁶⁹。通信と指揮関係の重要さは、ウッドワード、クラップ、トンプソンが4月16日に強襲揚陸艦「フィアレス」で会したときに明らかにされた。この後、相互にいらだつ機会が多々あった。時々、激しい表現があった。しかし、指揮官はおおむねお互いの専門家としての判断を尊重し、作戦の最終的な目的は達成された。考え違いが持ち上がったのはレピア (Rapier) 地对空ミサイルの能力に関するここ、またはアルゼンチン軍を誘い出す陽動作戦の適否に関する急いだ不十分な会話は問題点とすべきものと思われる。しかし、このことは個性の重要性を拒否することにならない。

⁴⁶⁶ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxi.

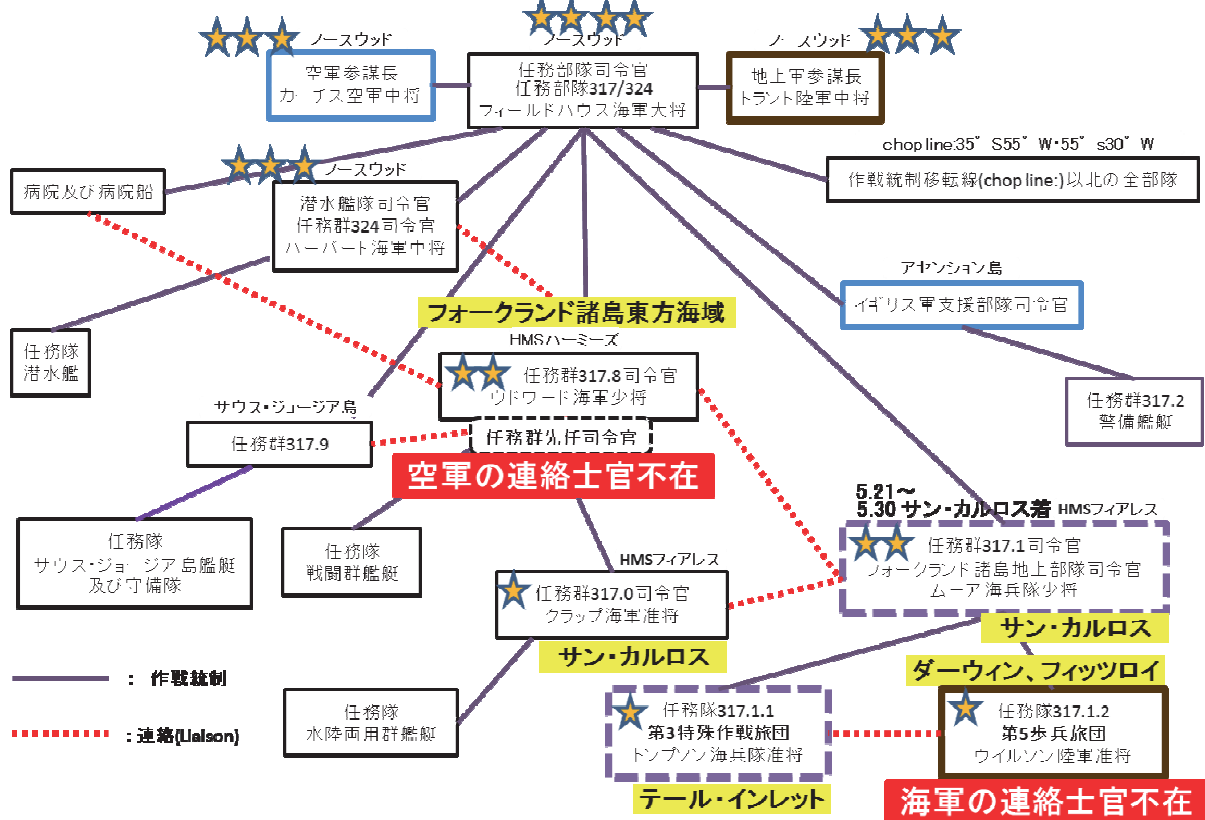
⁴⁶⁷ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxii.

⁴⁶⁸ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), xxxii.

⁴⁶⁹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition*, Vol. II, (Routledge 2007), pp.730f.

フィールドハウスの当時の海軍の幕僚によれば、任務部隊の指揮構造は総指揮官（CINC）であったフィールドハウスの次のような考えを反映していたという。それは、「彼ら（ウッドワード、クラップおよびトンプソン）、戦術指揮官としての役割は、作戦の段階に応じ必然的に決まるであろう」という考えであった。

図第4 6月2日時点のイギリス軍の指揮機構



Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign II* (2005)などを基に作成
 (ノースウッドの司令部で掲示されたという指揮系統図を基に作成)

ノースウッドの任務部隊司令部が作戦地域での活動のすべての要因を考慮に入れることが可能だと期待するのは非現実的であった。ウッドワードは上陸した指揮官に権限を行使するには適切な位置にいなかったが、陸上での作戦の指揮に関わらないことに十分悩んでいたという。

このような指揮関係は、トンプソンが悪夢のような兵站状態への対処に努めていた時期に、ロンドンから直接トンプソンに圧力が加かった際に崩れている。

トンプソンは、現場に3つ星（中将）の指揮官がいたならロンドンからの圧力からトンプソンたちを守れたと信じていた。トンプソンは、戦争後だが、そのような3つ星の指揮官に次のような期待を述べている。トンプソンおよびクラップはあくまで「対面による（face to face）指揮」の信者であった⁴⁷⁰。

⁴⁷⁰ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.86.

「配下の部隊を視察し (visit)、部下の問題および強点 (strengths) を知り、作戦のコンセプトを維持し、士気を高め、戦域における全体の戦術のバランスを指導し、特に、我々とノースウッドの司令部との距離を保つために行動する⁴⁷¹」

ムーア海兵隊少将が南大西洋に到着した後、その必要な役割を果たすことが可能になった。問題は、非常に重大な時に、ムーアは、ロンドンから南大西洋に移動中、連絡が取れないことが多かったことである。

これらは、真の統合司令部が設立し発展する以前のことであった。真の統合司令部は海軍兵力および陸軍兵力間の調整力を向上し、よりうまく戦域の航空兵力を提供したであろうとみている。

また、公式戦史は、指揮構造のほかに、不慣れな環境であまりに多くの異なる活動の調整に関係した問題も指摘している。公式戦史は、その原因を意思疎通 (communications) 不足とし、指揮の問題より悲惨で、時々致命的な結果をもたらしたとしている。意思疎通の悪さの幾つかは、上級司令部により緩和されたようだが、臨時の指揮の階層は意思決定を遅くし、作戦が局地的になるに従い、意志の疎通が悪くなるのは避けることはできなかったであろうと分析している。

そして、この問題の多くは、作戦前にあまり一緒に勤務することのなかった部隊に問題があり、司令部の幕僚（特に陸軍の第 5 歩兵連隊との）が作業手順を理解するための時間が不足していたことにあるとしている。

第 5 項 フィールドハウス・スタイルの任務部隊司令部

イギリスの遠征部隊の部隊編成、指揮系統など、作戦全般において、フィールドハウスが果たした役割はいうまでもないが大きい。しかし、任務部隊の司令官であったフィールドハウス海軍大將は回想録を残すことなく、すでに他界しているため、「コーポレート作戦」におけるフィールドハウス自身の考えを深く分析することはできない。ただフィールドハウスが「コーポレート作戦」で作り上げた 3 軍司令部 (tri-service command)⁴⁷² といえる司令部は、フィールドハウスの裁量によるものがほとんどであったが、多くの局面で既存の専門的な方法と組織で効率的に管理されたという⁴⁷³。

当時、イギリス軍は常設の統合司令部を設けていなかったため、空と陸の作戦に関する助言はロンドン北西部に位置するノースウッドのイギリス海軍の艦隊司令部で行われた。当時のイギリス本土の陸軍の司令部はロンドンの北西 100 キロメートルに位置するウィルトン (Wilton) に、空軍打撃部隊司令部 (HQ RAF Strike Command) は、ロンドンの西北西に位置するハイ・ウィコム (High Wycombe) (2007 年からイギリス航空軍団 (RAF Air Command)) に所在した。

⁴⁷¹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign-Revised and Updated Edition, Vol. II*, (Routledge 2007), p731.

⁴⁷² John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), pp. 16110.

⁴⁷³ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.339.

ノースウッドの艦隊司令部は、その司令部の任務の特性から、3軍 (tri-service) 共同の司令部としての役割を部分的に行っていたこともあり、任務部隊の司令部として、良く機能したと評価されている⁴⁷⁴。当時、艦隊司令部は、すでに海軍の航空部隊および空軍所属である地上配置の航空機に関する事項を扱い、そして海兵隊コマンド旅団を通じて陸上に関する作戦にもつながりがあったためである⁴⁷⁵。

しかし、戦闘における作戦は、かなり困難なことがあった点が指摘されている。その多くは作戦を指揮した者の状況に起因するものと分析されている⁴⁷⁶。

作戦指揮官は厳しい状況のなか、主要な資源には限界があり、指揮官は相当な危険を冒して、作戦を行っている。このような状況だったことから、作戦指揮官の間の緊迫状態は、個性の衝突、制限された意思疎通、特に作戦指揮官同士の階級の相違が加わった作戦指揮官同士の相対的な地位の不明確さが、緊迫状態を悪化させたと分析されている⁴⁷⁷。

ノースウッドの任務部隊の司令部と対照的に、地理的に分離された、作戦指揮官、トンプソン、クラブ、ウッドワードは、自分たちが必要なものを十分に認識していたが、他の任務群の困難さおよび限界を正しく認識していなかったと分析されている⁴⁷⁸。

空母戦闘群の指揮官ウッドワードと水陸両用戦群の指揮官のクラブが直接会ったのは、アセンション島沖での4月16日・17日および、フォークランド諸島沖での5月18日～20日だけであった。幕僚も含め関係者が皆揃い直接会ったのは、4月17日の1日だけであった⁴⁷⁹。

イギリス本土の主要な指揮官および幕僚と南大西洋に進出した指揮官および幕僚が一堂に会し、面と向かい会議を行ったのは、4月17日、大西洋上のアセンション諸島で、航空母艦「ハーミーズ(HMS Hermes)」で行われた会議だけである。イギリス本土に司令部を構えた任務部隊司令官のフィールドハウス大將は、空軍中將軍ジョン・カーチス、ジェレミー・ムーアと共にイギリス本土から航空機でアセンション島に来た。この時期は、フィールドハウスが決定した次の4つの軍事的目的を達成するために、5つのグループがすでに行動していた。

第1はフォークランド諸島周辺の海上封鎖 (sea blockade) の確立

第2はサウスジョージア島の奪回 (repossession)

第3はフォークランド諸島周辺の海上と航空における優勢の獲得

⁴⁷⁴ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁷⁵ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁷⁶ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁷⁷ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁷⁸ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁷⁹ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.349.

第4はフォークランド諸島の最終的奪回（repossession）である。

作戦指揮系統に対する混乱に関しては、任務部隊の全体の指揮官であったフィールドハウスに責任がある。ただ、フィールドハウスの責任は、最終的な成功とそのために負っていた大きな責任とを勘案し考慮すべきであろうとの指摘がある⁴⁸⁰。

全体の作戦指揮官には艦隊司令官（Commander - in - Chief Fleet, CINCFLFLEET）であった海軍大将ジョン・フィールドハウスが就いた。フィールドハウスはノースウッズの艦隊司令部で、主として、既存の幕僚を使用し続けた。すでに並置されていた、イギリス空軍のジョン・カーチス（Air Marshal Sir John Curtiss）空軍中將軍はフィールドハウスの副司令官（空）（Air Deputy）となった。ジョン・カーチス空軍中將軍は洋上作戦を支援する第18航空群を指揮していたイギリス空軍の司令官であった⁴⁸¹。第18航空群は1941年から、艦隊司令部に並置されている航空群であった。

イギリス空軍の役割が拡大すると、イギリス空軍打撃軍団（Strike Command）は責任を分割するよう提案してきたが、フィールドハウスは抵抗した。フィールドハウスは、責任を分割する代として、ノースウッズの司令部内のイギリス空軍の要員を増強した⁴⁸²。

このようにして、フィールドハウスはすべての任務部隊の作戦に関する統一的な命令の維持に努めた⁴⁸³。4月9日から陸上部隊副司令官（Land Forces Deputy）は海兵隊少将のジェレミー・ムーアが任命された。5月中旬に、ジェレミー・ムーアがフォークランド諸島に移動しフォークランド諸島陸上軍（Land Forces Falkland Islands: LFFI）の指揮官に就いた後、任務部隊の陸上部隊副司令官にはイギリス陸軍の南東地区司令官リチャード・トラント（Lieutenant General Richard Trant）陸軍中將が就いた。リチャード・トラント陸軍中將は任務部隊の指揮系統のなかで唯一、海軍とのつながりのなかった指揮官である⁴⁸⁴。

任務部隊は2つ編成された。1つは作戦で使用された水上兵力、陸軍兵力、空軍兵力からなる第317任務部隊（Task Force 317）であり、もう1つは潜水艦兵力からなる第324任務部隊（Task Force 324）である。潜水艦の作戦に関しては、潜水艦隊のハーバート中將（Flag Officer Submarine, Vice Admiral P.G.M. Herbert）の下で行われた。ノースウッズの艦隊司令部でフィールドハウスの参謀だったデイビッド・ハリファックス中將（Vice Admiral Sir David Hallifax）が海軍の計画の細部や幕僚業務の取りまとめを行った。

また、早い時期に、ノースウッズの司令部内に後方支援班（Logistic Support Cell）が設けられた。こ

⁴⁸⁰ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.345.

⁴⁸¹ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.339.

⁴⁸² Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.339.

⁴⁸³ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.339.

⁴⁸⁴ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.339.

れは3軍の要員で構成され、任務部隊に対するすべての後方面での要求および補給計画を調整をこなした。

フィールドハウスは、希少な資源を最適かつ経済的な使用および最も緊急の備品類の補給の優先順位を保証するためには、ノースウッドの司令部に設置する必要があったし、この後方支援班の設立は極めて重要で最も成功した1つと評価している⁴⁸⁵。

任務部隊指揮官には水陸両用戦の経験のある第3艦隊の指揮官（Rear Admiral D Reffell）が候補になった。また、サッチャー首相とノット国防相は自分たちの知らない者に指揮を任せることに懸念を見せたが、戦時は、平時に特別な役割に任命された者と仕事を続けることが重要だとする、参謀長委員会議長のルウィン大将と第一海軍卿リーチ大将の進言を受け入れている⁴⁸⁶。参謀長委員会議長（Chief of Defence Staff, CDS）のルウィン海軍大将をはじめ、フォークランド諸島奪回作戦の中核の指揮官、派遣部隊の指揮官ウッドワードと任務部隊司令官フィールドハウス大将はともに潜水艦の乗りであった。

ウッドワードは、5月1日以降、フォークランド戦争終了まで、航空母艦「ハーミーズ」に乗艦し、CTG317.8を指揮した。航空母艦「ハーミーズ」の艦長、リン・ミドルトン（Lin Middleton）大佐は航空機操縦士であったが、もう1隻の航空母艦「インヴィンシブル（HMS Invincible）」の艦長、ジェレミー・ブラック（Jeremy Black）大佐は砲術幹部（gunnery officer）であった。航空母艦「インヴィンシブル」は空母戦闘任務群の防空指揮艦としての役割を担った。

4月9日にフィールドハウスが公表した指揮系統には当初の指揮系統との違いが表れた。当初は、4つのグループはいわゆる「独立した同格の関係」（separate but equal）である。ただし、ウッドワードは任務部隊の指揮官を兼務しており、フィールドハウスの下の任務部隊317に、3つの群（空母戦闘群、水陸両用群、上陸群）が編成された形になっていた。

4月9日の指揮系統では、4つの隊は同格である。4月17日以降は、ウッドワードは「同輩中の第一人者」（primus inter pares）と見なされた。理由は、ウッドワードはすでに対処してきける任務の範囲と、クラップおよびトンプソンが直接ノースウッドの任務部隊司令部に彼らの要求を伝える必要があったためである。

特に、クラップがフィールドハウスに直接報告することを望んでいた。フィールドハウスが、クラップの要求に同意した結果、すべての3つの任務群指揮官が直接フィールドハウスに報告することになった⁴⁸⁷。

このことは、トンプソンも同様のことを述べている。作戦地域全体の指揮官（an in-Theatre overall commander）を必要としていたと。それは、対面による指揮（face to face command）の信仰者であるからと説明している。つまり、彼らの望んだ全般的な指揮官とは、現場で多くの時間を費やし、グループの多くの問題と兵力に精通し、明確な作戦コンセプトを維持し、士気を高揚し、戦域における全体的な戦術

⁴⁸⁵ John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), p.16111.

⁴⁸⁶ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.29.

⁴⁸⁷ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.xxxi.

面のバランス指揮し、特にノースウッズの司令部から我々を守るような指揮官と述べている⁴⁸⁸。

ウッドワードは先任の任務群指揮官 (Senior Task Group Commander) であった。ウッドワードは2つ星の将官であり、クラップとトンプソンは1つ星の将官であった。このような指揮系統における上級指揮官同士の曖昧な関係が作戦を実行していくうえで困難を生起させたと指摘されている⁴⁸⁹。5月30日、ジェレミー・ムーアがイギリスの司令部から、フォークランド水道のサン・カルロスに到着後、指揮系統に変化が起こった。クラップはトンプソンとの直接の関係はなくなり、地区司令部 (Divisional HQ) を経て行うことになった。

6月2日、ノースウッズの司令部で指揮系統図が用意された。2つの旅団が・ムーアと共にフォークランド諸島で作戦を始めた頃である。ローレンス・フリードマンはフォークランド戦争の公式戦史の第II巻・戦争と外交の改訂版に、6月2日以降の指揮系統図は掲載し、指揮系統に関し第I巻に筆を加え、指揮系統の複雑さを説明している⁴⁹⁰。

公表されたものではないため、その位置づけは不明確だが、当初あった各群の「独立した同格の関係」(separate but equal) という前提にはないことが見て取れる。つまり、クラップはウッドワードの下にあり、トンプソンと第5歩兵旅団の准将トニー・ウィルソン (Tony Wilson) はジェレミー・ムーアの下にあるように示されている。イギリス陸軍第5歩兵旅団の南大西洋への派遣はフォークランド諸島のアルゼンチン軍の着実な増強したことへの対応であり、陸上兵力の主隊となる第3コマンド旅団の出港後に、この旅団増派派遣が決定されている⁴⁹¹。陸上兵力の主隊となった第3コマンド旅団、約5,500名は、4月6日にHMS強襲揚陸艦「フィアレス (Fearless)」、4隻の兵站揚陸艦(Logistic Landing Ships)、徴用船「キャンベラ (Canberra)」、徴用船「エルク (Elk)」ともに南大西洋に進出していた。この部隊は、サウス・ウェールズ (South Wales) で約2週間、集中的な訓練を行い、装備を整え、編成を組み直した後、5月12日にサウスハンプトン (Southampton) から、民間から徴用した客船「クイーン・エリザベスII」に乗船し出港した⁴⁹²。こうして、最終的に、イギリスの任務部隊指揮官にとって約10,500名の陸上兵力をもって、フォークランド諸島の奪回作戦を遂行する態勢となった。戦争の終盤には、ムーアはフォークランド諸島陸上軍指揮官になっている。

公式戦史は指摘している。もし溝があったとしたなら、戦域において優先順位を評価でき、そしてノースウッズの司令部と直接交渉ができる3つ星の指揮官 (Three-Star commander) であると記述している。

⁴⁸⁸ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.

⁴⁸⁹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.30f.

⁴⁹⁰ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.31.なお、南緯35度西経55度と南緯55度西経30度を結ぶ線を指揮分離線 (chop line) とし、その線を通過 (南進) した艦艇は、CINCFLEETの作戦統制から離れるとされている。

⁴⁹¹ John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), p.16114.

⁴⁹² John Fieldhouse, "Despatch by Admiral Sir John Fieldhouse, G.C.B., G.B.E., Commander of the Task Force Operations in the South Atlantic: April to June 1982," *The London Gazette* (no. 49194, 13 Dec. 1982), p.16114.

このような指揮官の不在による不具合は、トンプソン が、フォークランド戦争後、強く感じ表明してきたことである。もしウッドワードが航空母艦「ハーミーズ」を離れることができればその役を遂行できた可能性がある。また、ジェレミー・ムーアが南大西洋に着いたとき、トンプソンを支えることが可能となった。海上と陸上の作戦の分離 (separate) は、いずれの方法でも問題を引き起こしたであろうと、公式戦史は記述している⁴⁹³。

潜水艦兵力は、任務部隊を別に編成し (TG324.3) ノースウッドのハーバート中將が直接指揮し、各潜水艦が任務隊に指定された (TU324.3.xx)。報告はウッドワードではなく、ノースウッドのフィールドハウスに直接行われていた。ウッドワード自身潜水艦乗りであり、潜水艦に関する知識、各潜水艦の艦長を知っており、それらを効果的に作戦統制する自身はあった。フォークランド戦争中、ウッドワードは潜水艦を直接コントロールできず、悔しい思いをしたようである。ある程度、ノースウッドが原子力潜水艦のコントロールを保ったのは、司令部が冷戦下の作戦行動を予期したためであり、戦闘グループの指揮官にそのような役割は期待しなかったからである。また、イギリスの最終兵器ともいえる原子力潜水艦の使用が政治的な論争を伴う可能性に満ちていたという特別の理由もあった⁴⁹⁴。

イギリス軍が陸上に足場を固めた後は、陸上兵力の作戦統制は陸上軍指揮官としてのトンプソンの下に移された。准将トニー・ウィルソンに指揮される第5歩兵旅団投入が決定された際、地域指揮系統が必要となり、その役にムーアが就いた。副司令官 (陸) として、南東地区司令官 (General Officer Commanding) のジョン・ウオーター (John Waters) 准将が伴った。ノースウッドの司令部におけるジェレミー・ムーアの後任は、陸軍中將リチャード・トラント (Lieutenant General Richard Trant) が就いた。

イギリスのフォークランド戦争の公式戦史はムーアの指名は論理的に必然的であったとしている。その理由は、その時点まで任務部隊司令部で勤務しており本土における政治と軍事の状況を理解していたことと、任務部隊司令官および幕僚との構築された人間関係を挙げている。

海兵隊に5個大隊を提供する際、陸軍には不平があった。その理由は、戦場にいる派出兵力に直接的な指揮ができないことであった。すべて、ノースウッドの司令部を経由しなくてはならなかったこと、陸軍に関する限り、通常計画されたように戦闘は行われなかったと指摘する声が陸軍の将官のなかにあった。ただ、一般に調整は機能し、ムーアは作戦のなかの自身の役割を十分効果的に実行したとの評価もある⁴⁹⁵。

第6項「コーポレート作戦」におけるイギリス空軍(RAF)の貢献

「コーポレート作戦」は海軍主導の作戦であつが、イギリス空軍(RAF)は任務部隊の兵力として貢献した。例えば、サン・カルロスへの上陸後のグース・グリーンでの陸上作戦では陸軍第5歩兵旅団から海兵隊第3コマンド旅団に編入されていた第2空挺大隊に対して接航空支援を行ったのは、海軍の航空母艦「ハ

⁴⁹³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.31.

⁴⁹⁴ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition: War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007), p.33.

⁴⁹⁵ Martin Middlebrook, *THE FALKLANDS WAR* (Pen & Sword Books Limited, 2012), p.181.

ーミーズ」から発艦したイギリス空軍のハリアー(GR.3)であった。

イギリス空軍による「コーポレート作戦」への貢献はおおむね次の3つに分けられる⁴⁹⁶。1つ目は、「コーポレート作戦」の全期間において前進基地となったイギリス本土から約3718マイルの中部大西洋にあるアセンション島(ワイドアウェイク(Wideawake)基地)への任務部隊の艦艇のための兵員および装備品の航空輸送である。このイギリス空軍による航空輸送があったことで、任務部隊はイギリス本土内で必要な兵員および装備品を乗艦および搭載できるまで待つことなく、迅速に南方に向け出港することが可能であった⁴⁹⁷。チリおよび南アフリカはイギリス軍に飛行場を提供可能であったが、当時の政治的および戦略的状况からイギリス政府には受け入れられないことであった。

しかし、アセンション島には艦艇が着岸できる岸壁があるわけではなく、沖合500メートルから1000メートル付近の錨地は長く大きなうねりにさらされるため、艦対艦、艦対陸上の移載にはヘリコプターが不可欠であった⁴⁹⁸。

2つ目は、空母戦闘群の航空母艦艦載機である海軍航空隊のシー・ハリアーおよびヘリコプターの補充としてイギリス空軍のハリアー(GR.3)戦闘機およびヘリコプターを提供したことである。シー・ハリアーは28機、ハリアー(GR.3)は14機が「コーポレート作戦」で使用された⁴⁹⁹。

3つ目は、長い航続力を持つ固定翼機をアセンション島に進出させ、航空兵力をアセンション島から完全排除水域までの約3100マイル、フォークランド諸島までの約3300マイルにかけて投入させたことである。バルカン戦略爆撃機、ニムロッド洋上哨戒機、輸送機ハーキュリーズおよび空中給油機ヴィクターが使用されたが、北大西洋条約機構(NATO)の作戦では空中給油の必要がほとんどなかったため、1960年代には装備していたイギリス空軍のバルカン戦略爆撃機から空中給油装置は取り外されていた。バルカン戦略爆撃機に直ちに空中給油装置を装備している⁵⁰⁰。

サウスジョージア島奪回作戦である、「パラケット作戦(Operation Paraquet)」でもイギリス空軍は貢献している。この作戦は、駆逐艦アントリム艦長を指揮官とし、HMS「アントリム」、フリゲート艦「ブリマス」、氷海警備船「エンデュアランス」、RFA油送船「タイドスプリング」、イギリス海兵隊42コマンド部隊のM中隊(M Company)、海軍特殊舟艇部隊(SBS)、イギリス陸軍の特殊空挺部隊(SAS)からなるTU317.9が遂行したが、4月20日から25日の間、サウスジョージア島からアルゼンチン本土の沿岸までをアルゼンチン海軍に対する早期警戒を目的にヴィクター・タンカーの支援を受けたイギリス空軍のヴィクター(Victor)ニムロッド洋上哨戒機が哨戒を実施している。なお、原子力潜水艦「コンカラー」がア

⁴⁹⁶ Sir John Curtiss, "The RAF Contribution to The Falklands Campaign," *The Naval Review*, Vol.71, No.1, January 1983, p.24-32.

⁴⁹⁷ Sir John Curtiss, "The RAF Contribution to The Falklands Campaign," *The Naval Review*, Vol.71, No.1, January 1983, p.24.

⁴⁹⁸ David Brown, *THE ROYAL NAVY AND THE FALKLANDS WAR*, Leo Cooper, London, p.70.

⁴⁹⁹ Sir John Curtiss, "The RAF Contribution to The Falklands Campaign," *The Naval Review*, Vol.71, No.1, January 1983, p.24.

⁵⁰⁰ Sir John Curtiss, "The RAF Contribution to The Falklands Campaign," *The Naval Review*, Vol.71, No.1, January 1983, p.24.

ルゼンチン側の増援を阻止する目的でサウスジョージア島沖を哨戒している。

5月1日から、イギリス軍がフォークランド諸島の滑走路などに対し空爆を実施した。アセンション島からヴィクター (Victor)・タンカーとニムロッドに空中給油を受け16時間をかけてきたイギリス空軍のバルカン (Vulcan) 爆撃機が夜間ポート・スタンレーの飛行場を爆撃し、滑走路にクレーターを作った。バルカンの任務は飛行場と周辺のレーダー施設への攻撃であった。

なお、イギリス空軍の第18飛行隊は4機のCH-47チヌーク・ヘリコプターからなる輸送部隊を編成してフォークランド諸島に派遣された。輸送していた「アトランティック・コンベアー」がアルゼンチン軍のミサイル攻撃を受け、撃沈。撃沈前に離陸しフォークランド諸島に向かっていた1機を除き整備機材、予備品等も含め3機を失った。被害を免れた1機はフォークランド諸島に到着後、戦争終結まで弾薬や野砲の輸送、イギリス軍兵士やアルゼンチン捕虜の輸送面で支援している。

また、イギリス陸軍による航空兵力の面での貢献としてヘリコプター兵力の提供がある⁵⁰¹。イギリス陸軍航空隊 (Army Air Corps) の第656飛行大隊のガゼル (Gazelle) AH.1を6機およびスカウト (Scout) AH.1を6機である。

図第5 イギリス任務部隊の航空兵力 (当時)

海軍	海兵隊	陸軍	空軍
			アセンション島
シー・ハリヤー:36機			ハリヤー:10機
ウェセックス・ヘリMk3:2機	ガゼル・ヘリ:10機	ガゼル・ヘリ:6機	チヌーク・ヘリ:1機
ウェセックス・ヘリMk5:56機	スカウト・ヘリ:9機	スカウト・ヘリ:7機	ハーキュリーズ 戦術輸送機C.1 ハーキュリーズ戦術輸送機 C.3
リンクス・ヘリ:24機			ファントム FGR.2:3機
シー・キング・ヘリMk2:15機			ニムロッドMR1:2機
シー・キング・ヘリMk4:14機			ニムロッドMR2:8機
シー・キング・ヘリMk5:22機			戦略爆撃機バルカン:4機
ワズプ・ヘリ:11機			空中給油機ヴィクター:20機
			救難用シー・キング・ヘリ:1機
海軍機計:180機	海兵隊計:19機	陸軍計:13機	空軍計:11機 (アセンション島を除く)
総計:223機(戦闘機46機。ヘリコプター:117機)			

Linda Washington ed., *Ten years on: The British Army in the Falklands War*などを基に作成

⁵⁰¹ Philip D.Grove, "Falklands Conflict 1982 - The Air War: A New Appraisal," *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p.273.

図第6 イギリス任務部隊の航空兵力(その後の統合状況)

■ :アセンション島

海軍	海兵隊	陸軍	空軍	
Joint Force Harrier (2000年)				
Joint Helicopter Command (1999年)				ハーキュリーズ 戦術輸送機 C.1 ハーキュリーズ 戦術輸送機 C.3
				ファントム FGR.2:3機
				ニムロッドMR1:2機
				ニムロッドMR2:8機
				戦略爆撃機ヴァルカン:4機
				空中給油機ヴィクター:20機
海軍機計:180機	海兵隊計:19機	陸軍計:13機	空軍計:11機 (アセンション島を除く)	
総計:223機(戦闘機46機。ヘリコプター:117機)				

Linda Washington ed., *Ten years on: The British Army in the Falklands War* などを基に作成

第7項 統合の観点から見た失敗事例 (フィッツロイにおける上陸)

イギリス軍はサン・カルロス湾における水陸両用作戦は無事成功させたが、フィッツロイへの上陸作戦では大きな被害を受けている。フィッツロイへの上陸作戦は、サン・カルロス湾における上陸作戦とは違って本格的な水陸両用作戦ではなく兵員および物資の輸送に近い内容であったが、水陸両用艦で上陸中にアルゼンチン軍機の攻撃を受け、フォークランド戦争中で最も大きな被害を受けた。水陸両用艦1隻が沈没、1隻が大破、上陸揚収艇1隻が大破し46名のイギリス人および中国人が死亡した。

5月30日、ジェレミー・ムーア海兵隊少将およびトニー・ウィルソン(Tony Wilson)陸軍准将が旗艦「ファイアレス」でサン・カルロスに到着し、ムーアはフォークランド諸島陸上軍指揮官(Commander Land Forces Falklands Islands: CLFFD)をトンプソン海兵隊准将から引き継いだ。トンプソンは自分の部隊、海兵隊第3コマンド旅団(3rd Commando Brigade)のいるティール・インレット(Teal Inlet)に司令部を移動した。本来、ムーアは5月20日以降、フォークランド諸島陸上軍(Land Forces Falklands Islands(LFFD):第317.1任務群)の指揮官であり、海兵隊第3コマンド旅団および陸軍第5歩兵旅団(5 Infantry Brigade)はムーアの指揮下の部隊であった。

第5歩兵旅団のフォークランド諸島到着後の役割は、明確に定められていなかった。選択肢として、サン・カルロスの橋頭堡を強化する兵力となるか、または異なる地域での進撃兵力となるかの2つがあった。

ルウィン参謀長委員会議長とその幕僚は、サン・カルロスの防衛兵力の交代と考えていたようである⁵⁰²。ウィルソンは第 5 歩兵旅団を南方を進撃させることを望んでいたため、「クイーン・エリザベス II」でフォークランド諸島に向かう途上、ムーアに第 3 コマンド旅団と第 5 歩兵旅団が別々にポート・スタンレーに進撃できるように、輸送手段として既存のヘリコプターを 2 つの旅団に同数割り当てることを提言していたようである⁵⁰³。

陸上軍の兵力の再編を行っている。これは、兵力の観点からというよりは、陸軍と海兵隊間の駆け引きによる性格の決定であったという指摘がある⁵⁰⁴。第 5 歩兵旅団所属であり、「コーポレート作戦」開始時に海兵隊第 3 コマンド旅団に編入されていた第 2 空挺大隊(2nd Battalion, The Parachute Regiment)および第 4 野戦連隊(Field Regiment)所属第 29 砲兵中隊(Battery)を第 5 歩兵旅団に復帰させている。海兵隊第 3 コマンド旅団の第 40 コマンド大隊はサン・カルロス地区の防衛のために残ることになった。トンプソンの当初の計画では、第 2 空挺大隊がダーウィンおよびグース・グリーンでの作戦を完遂後、サン・カルロスの防衛は第 2 空挺大隊に行わせる計画であった⁵⁰⁵。

6 月 1 日から、サン・カルロスに上陸を始めた第 5 歩兵旅団で最初に任務に就いたのは、第 7 代エディンバラ公グルカ小銃兵第 1 大隊(1st Battalion, 7th Duke of Edinburgh's Own Gurkhas)の大半は、チヌーク(Chinook)・ヘリコプターでグース・グリーン に移動して第 2 空挺大隊からグース・グリーン 地区の責任を引き継いだ。

ムーアは 2 つの旅団を同じように扱おうと考えていたが、実行できない状況があった。ムーアがフォークランド諸島陸上軍指揮官に着いたとき、第 3 コマンド旅団の 3 個大隊はノースウッドの任務部隊司令部から行動を起こすよう直接指示を受けたトンプソンがすでにポート・スタンレーへ向け進軍させていたためである。「アトランティック・コンベアー」の沈没により 3 機のチヌーク・ヘリコプターを失ったこともあり、すでに北翼で行動を起こしている第 3 コマンド旅団の補給を継続して、第 5 歩兵旅団の南翼の侵攻、兵員および補給品等の輸送を同時に行うにはリコプターが十分ではなかった⁵⁰⁶。このような状況下で、ウィルソンは徒歩で進軍することを決心したが無理なことが分かり取り止めている。

これは、6 月 1 日にサン・カルロスに上陸した第 5 歩兵旅団のポート・スタンレーへの場当たりの東進と他の要因が重なり、艦隊補助部隊 (RFA) の LST「サー・ガラハド」などの惨事が起こったとマーティン・ミドルブルック(Martin Middlebrook)は見ている⁵⁰⁷。数日前の 6 月 6 日の夜(0400Z 時頃)、惨事の予兆ともいえる誤射(friendly fire)が生起していた。駆逐艦「カージフ(Cardiff)」によるイギリス陸軍航空隊ヘリコプター・ガゼル(Gazelle)機撃墜である。

⁵⁰² Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.

⁵⁰³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II, Revised and Updated Edition : War and Diplomacy* (London: Routledge, 2007),p.598.

And, Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.

⁵⁰⁴ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.

⁵⁰⁵ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.

⁵⁰⁶ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.299.

⁵⁰⁷ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.299.

第5歩兵旅団の信号方式は海兵隊第3コマンド旅団が使用している方式ほど現代的ではなかった。フォークランド諸島陸上軍の指揮官であるジェレミー・ムーア海兵隊少将が乗艦する「フィアレス(HMS Fearless)」およびグース・グリーンに在る海兵隊第3コマンド旅団は、共に、フィッツロイおよびブラフ・コウヴの部隊に直接信号を送ることができなかった。このため、第5歩兵旅団は、信号の中継所を設営するため、グース・グリーンとフィッツロイの間に位置する Wickham 山にガゼル・ヘリコプターにより第5歩兵旅団の信号員5名を移送した。このガゼルを「カージフ」が、アルゼンチン軍機エルクレス (ARA Hercules) と評価しシー・ダート・ミサイルで撃墜した。

「カージフ」は「ヤーマス(Yarmouth)」と共に、ヘリコプターの航路に近い沿岸に位置し、要請があればアルゼンチン軍基地を射撃できる位置にいた。第5歩兵旅団には、海軍の連絡士官の配属はなく、ヘリコプターの飛行計画をムーアの司令部に伝達する必要は認識されることはなく、海軍側は飛行計画を知ることにはなかった。第5歩兵旅団側は第5歩兵旅団の地域内でヘリコプターを飛行させる独自の権利があると考えていた⁵⁰⁸。

以上のような背景のなか、「カージフ」は、信号員を移動するために東方に飛行中のガゼル・ヘリコプターをレーダーで探知した(0400Z時)。「カージフ」は、レーダー探知した目標の速力がアルゼンチン軍機のC-130sエルクレスと同様であり、その飛行経路から、ポート・スタンレー飛行場に補給品を輸送するアルゼンチン軍機と判断した。ガゼルは、敵味方識別装置(IFF)を作動させていなかった。IFFは電子機器に干渉すると思われたためであった。

アルゼンチン軍機プカラ攻撃機がアルゼンチン本土からフォークランド諸島に補給のためポート・スタンレーに向かったという情報を受けていた「カージフ」高い警戒態勢を維持していた。「カージフ」はレーダー探知目標は明らかにポート・スタンレーに向かっていたと判断し、比較的遅く動く航跡映像だけでは敵か味方かは判断できないが、「カージフ」は友軍機(陸軍機)が「カージフ」の行動区域で行動するという情報を得ておらず、「カージフ」はシー・ダート・ミサイル2発を発射。ガゼルは撃墜、搭乗員および信号員は死亡した。翌日、「カージフ」の艦長は友軍機であったことに気づき、ムーアに報告している⁵⁰⁹。

以上のような、陸軍と海軍の間の調整および協力関係の不足は、数日後の揚陸艦「サー・ガラハド」などの惨事の要因となった。

経空脅威に直面するなか、日中に上陸作戦を行うことは重大な危険を伴うということは昔から統合作戦における歴史的な教訓である⁵¹⁰。しかし、複数の要因が重なり、晴天の日中に、ハリヤーの援護のない状況下で、イギリス軍の揚陸艦は兵員および物資を揚陸することになり、アルゼンチン軍機の攻撃を受け、フォークランド戦争中、最も大きな被害を受けることになっている。ただし、そのように至るまでに幾つ

⁵⁰⁸ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.299.

⁵⁰⁹ Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),p.300.

⁵¹⁰ R Martin Middlebrook, *The Falklands War*, (Pen & Sword Military, 2012),ear Admiral E.F.Gueritz,CB,OBE,DSC, "The Falklands : Joint Warfare Justified," *RUSI Journal*, September, 1982, Vol.127, No.3, p.50.

かの原因が考えられ⁵¹¹、統合面の要因がすべてというわけではない。

このような被害を受けた3日後に、ポート・スタンレーへの攻撃が行われ、第5歩兵旅団は加わり、最終的な目標であったポート・スタンレー攻撃に大きな影響はなかったためか、公式には、空母戦闘群の指揮官であったウッドワード海軍少将と水陸両用群の指揮官であったクラブ海軍准将の双方の責任問題にはなっていない。しかし、両者はそれぞれの回顧録のなかで、ウッドワードは、兵站揚陸艇(Logistic Landing Ship: LSL)を使用するというウッドワードの助言にクラブが従わなかったことを責め、一方、クラブはウッドワードがハリアーの戦闘空中哨戒(Combat Air patrol: CAP)のカバーを欠いたことを責めている。

次のような原因が指摘されている⁵¹²。

○陸軍第5歩兵旅団は海軍との作戦に未習熟であった。

○陸軍第5歩兵旅団に海軍連絡士官が配置されていなかった。

○陸軍第5歩兵旅団は海兵隊第3コマンド旅団にガゼル・ヘリコプターの飛行情報を提供しなかったため、海軍側はガゼルの飛行を知ることができなかった。

○空母戦闘群は陸上軍と水陸両用群にアルゼンチン軍輸送機を撃墜するために駆逐艦を配置させたことを知らせなかった。

○ガゼル・ヘリコプターは、他の機器に干渉するとの理由で敵味方識別装置(IFF)を切っていた。

以上の味方機撃墜事故は、しばらくふせられていたが、後に公となり調査委員による調査が行われ、1986年11月には報告書が提出された⁵¹³。

ジャーナリスト・歴史家の Max Hastings によれば、第5歩兵旅団が要請していたハリアーによる戦闘空中哨戒機の欠落、海軍艦艇による護衛が行われなかったこと、空襲警報(red)が RFA の揚陸艦「ガラハド (Galahad)」に届かなかったこと、レピア地対空ミサイルの設置の遅れ、計画の崩壊、連絡士官の挫折、これらの要因のすべてが重なったことが、6月8日の揚陸艦およびウェールズ近衛兵大隊員の運命を決したとしながらも、最も重大な失敗を、意思疎通の失敗、主要な指揮官が部隊が何処で何時、何を実施しているかという事を知らなかったことだと分析している⁵¹⁴。なお、ハリアーはアルゼンチン軍機による攻撃が行われる前、6月8日の朝まで戦闘空中哨戒を行っていた。戦時内閣は、フィッツロイでの被害を公表しないことにした。

⁵¹¹ Robert S. Bolia, "The Falklands War: The Bluff Cove Disaster," *Military Review*, 2004, November-December, pp.66-72.

⁵¹² Robert S. Bolia, "The Falklands War: The Bluff Cove Disaster," *Military Review*, 2004, November-December, pp.67.

⁵¹³ Office of the Commander-in-Chief Fleet, Report of Board of Inquiry into Loss of an Army Air Corps Gazelle over the Falkland Islands on 6 June 1982.

⁵¹⁴ Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands* (New York: W. W. Norton & Company, 1997), p.356f.

【イギリス軍の南方戦略における兵力の動き】

- 5月 31日 第42コマンド大隊ケント山に上陸
- 6月 1日 陸軍第5歩兵旅団、サン・カルロスに上陸を開始
- 6月 2日 第2空挺大隊、グース・グリーンからブラフ・コウヴにヘリコプターで移動（～3日）
- 6月 5日 スコットランド近衛兵第2大隊、ブラフ・コウヴに向け出発（海路）
- 6月 6日 陸軍のガゼル・ヘリコプターを「カージフ」が誤射
- 6月 6日 スコットランド近衛兵第2大隊、ブラフ・コウヴに上陸
- 6月 6日 ウェールズ近衛兵大隊（半分）、ブラフ・コウヴに向け出発（海路）
- 6月 7日 ウェールズ近衛兵大隊（半分）、ブラフ・コウヴに上陸
- 6月 7日 ウェールズ近衛兵大隊（残り）、ブラフ・コウヴに向け出発（海路）
- 6月 8日 揚陸艦「サー・ガラハド」撃沈、揚陸艦「サー・トリストラム」大破
- 6月 8日 ムーア、ポート・スタンレー攻撃計画を最終決定



図第7 イギリス軍の展開状況（6月上旬）

第3節 統合という観点から見たアルゼンチン軍

アルゼンチン軍の国防省の中央集権化は弱く、統合幕僚の組織もなかった⁵¹⁵。このため、アルゼンチン軍は領土紛争に関する緊急事態への対応計画を通常の業務として準備していたが、その計画は、概して、個々の軍種内にとどまる内容であり、各軍は自軍のことに集中していたため、統合した計画作りは最小限となっていた⁵¹⁶。

危機に直面した際に各軍は相当程度、共同で対処していた。この場合、通常、制度化された手順によるというよりは、臨時の委員会により行われていた。フォークランド諸島（フォークランド諸島のスペイン語はマルビナス）への侵攻、つまり「ロサリオ作戦」および占領後の作戦に関しても例外ではなかったとみられている⁵¹⁷。

アルゼンチンによるフォークランド諸島侵攻という奇襲は、実行時期を早めたという点は別として、アルゼンチン軍（アルゼンチン海軍および海兵隊）はフォークランド諸島侵攻作戦は良く準備していたといえるが、イギリスの奪回に対する準備をしていなかったと一般に分析されている。

例えば、アルゼンチンがフォークランド諸島統合司令部を創設したのは4月26日になってからであり、地域統合司令部の創設は5月の下旬、23日になってからであった⁵¹⁸。このように、アルゼンチン軍のフォークランド諸島の占領を維持するための統合的運用は遅れていた。

アルゼンチン軍にとって、統合行動（joint action）は、大きな価値のあるものではなかったが、マルビナスの防空などで3軍の連携により成果をあげた事例があった⁵¹⁹。ラテン・アメリカの海軍に詳しい、ロバート L.シーナ（Robert L. Scheina）はアルゼンチン軍の統合面に関し次のような評価をしている⁵²⁰。

シーナはフォークランド戦争におけるアルゼンチン軍の統合の観点から、戦略的または概念的な面では存在しなかったが、作戦面および戦術面では存在したと分析している。そして、そのすべての事例は、共通の敵に立ち向かうために、各軍種の偏狭さを忘れた中堅の幹部によるものであったとしている⁵²¹。ただし、作戦面および戦術面における統合は少なく、遅すぎたために戦略的、概念的統合の不足を補うまでではなかったと分析している⁵²²。具体例として次の事例を挙げている。

まず、アルゼンチン空軍機のみならず海軍航空機に対するアルゼンチン空軍が2機保有していた KC-130 給油機による空中給油である⁵²³。この空給油がなければ、アルゼンチン軍の航空機は目標としたイギ

⁵¹⁵ Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston: Faber and Faber, 1991, first published 1990), p.103.

⁵¹⁶ Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston: Faber and Faber, 1991, first published 1990), p.103.

⁵¹⁷ Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston: Faber and Faber, 1991, first published 1990), p.103.

⁵¹⁸ Stephen Prince, "British Command and Control in the Falklands Campaign", *Defense & Security Analysis*, Vol.18, No.4, p.349.

⁵¹⁹ Rubén O. Moro, *The History of the South Atlantic Conflict: The War for the Malvinas* (the original title: *La Guerra inaudita*), Michael Valeur tr. (New York: Praeger, 1989), p.95.

⁵²⁰ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, pp.95-101.

⁵²¹ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, pp.95-101.

⁵²² Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, pp.97.

⁵²³ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.95.

リス艦艇の上空周辺に数分しか滞空できず、アルゼンチン航空機によるイギリスの艦艇に対する攻撃は極めて困難となっていた⁵²⁴。具体的には、アルゼンチン空軍および海軍が運用した両軍の主力攻撃機スカイホーク(A4s)である（空軍は 68 機、海軍は 16 機保有）。

また、アルゼンチン海軍によるエクゾセ・ミサイル装備のシュペル・エタンダールの運用である。アルゼンチン海軍航空隊は攻撃機スカイホークの後継攻撃機としてシュペル・エタンダールを 5 機および本機の主要兵装であるエグゾセ空対艦ミサイルを 5 発、作戦運用可能な状態にしていたが、シュペル・エタンダール攻撃機によるイギリス艦艇への攻撃は最低 1 回の空中給油が必要であった⁵²⁵。

アルゼンチン軍は、シュペル・エタンダール攻撃機によるイギリス艦艇に対する攻撃を 5 回実施した。5 回の攻撃のうち 2 度、イギリス艦艇を沈めている。1 隻は駆逐艦の「シェフィールド」であり、もう 1 隻は、徴用船 RO-RO コンテナ船「アトランティック・コンベアー」である。「アトランティック・コンベアー」は陸上での作戦に必要なヘリコプター、レピア地対空ミサイル、作戦資材などを積載していたため、以後のイギリス軍の作戦に大きな制約を課すこととなっている。

5 月 30 日、5 回目で最後となったシュペル・エタンダールは、飛び立つ航空基地から 500 マイルの目標の攻撃を任務としたため 3 回空中給油を受けている。

このように、アルゼンチン海軍航空隊はアルゼンチン空軍による空中給油がなければ、「シェフィールド」および徴用船「アトランティック・コンベアー」を沈め、駆逐艦「アーデント」などイギリスの艦艇に被害を与えることはできなかったといわれている⁵²⁶。

シーナは次に、東フォークランド島におけるポート・スタンレー（アルゼンチン名：プエルト・アルヘンティーノ（Puerto Argentina））の飛行場の防衛における戦術レベルの統合的な運用を挙げている⁵²⁷。フォークランド諸島を占領したアルゼンチン軍はポート・スタンレーの飛行場の防衛において、陸軍の 2 連装砲のレーダー管制エリコン 35 ミリメートル機関砲をアルゼンチン空軍の搜索レーダー、アルゼンチン海軍の通信員、作図員、方向指示員で運用した⁵²⁸。

アルゼンチンのマルビナス守備隊はポート・スタンレー飛行場の防空を以上のように運用し 5 機のハリアーを撃墜した。イギリスの空母戦闘群はハリアーによるポート・スタンレー飛行場に対する爆撃の要領を近接爆撃から爆撃精度が低下するロブ爆撃（lob bombing）へと変更させられている⁵²⁹。

イギリス軍のバルカン戦略爆撃機およびハリアーによる飛行場への攻撃にもかかわらず、ポート・スタンレーの飛行場はアルゼンチンのフォークランド諸島の守備隊が降伏する 6 月 14 日までアルゼンチンの輸送機（ターボプロップのロッキード L-188：エレクトラ（Electra））が着陸可能であったという事実が

⁵²⁴ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.95.

⁵²⁵ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.95.

⁵²⁶ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.96.

⁵²⁷ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.96.

⁵²⁸ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.96.

⁵²⁹ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

ある。このようなアルゼンチン軍の防空努力の成果であったとシーナは指摘している⁵³⁰。

次にシーナがアルゼンチン軍の統合面で指摘しているのは、マルビナス守備隊がイギリスの駆逐艦「グラモーガン」に被害を与えたアルゼンチンの守備隊が発射したエクゾセ・ミサイルの運用である⁵³¹。

「グラモーガン」に被害を与えたエクゾセ・ミサイルはアルゼンチン軍がフォークランド諸島に侵攻後、イギリスとアルゼンチンの緊張が高まる中、アルゼンチン空軍 C - 130 輸送機によりアルゼンチン本土からフォークランド諸島に輸送されたものであった⁵³²。

もともと、アルゼンチン海軍の 42 級駆逐艦「サンティシマ・トリニダド」に装備されていたエクゾセ・ミサイルおよび発射台であった。それをプエルト・ベルグラノーのアルゼンチン海軍基地で応急装備の射撃指揮装置につなぎ、被牽引車に据え付けたものである。アルゼンチン軍は、日曜大工の発射台 (Instalación de Tiro Berreta) と名付けていた⁵³³。アルゼンチンの守備隊はフォークランド諸島に空輸されたエクゾセ・ミサイルをアルゼンチン陸軍の地上監視レーダー (Rasit : Rader Surveillance Intermediate Terrain) と組み合わせ、海兵隊員が操作した⁵³⁴。

この他、シーナがアルゼンチン軍の統合面として、アルゼンチン空軍攻撃機が艦艇攻撃訓練を実施する際に、アルゼンチン海軍はイギリスで建造された 42 級駆逐艦を目標艦として提供していたこと、アルゼンチン空軍と海軍がその不十分な偵察兵力を共有していたこと、アルゼンチン空軍がアルゼンチン海軍の修理を必要としたエクゾセ・ミサイルをリオ・グランデ空軍基地からエスポーラ (Espora) 空軍基地へ空輸したことを挙げている⁵³⁵。

フォークランド戦争後、最後のアルゼンチン軍事評議会は、フォークランド戦争の調査を退役アルゼンチン陸軍の Benjamin Rattenbach に命じた。Benjamin Rattenbach は陸海空の軍人からなる統合チームを作り報告書を作成したが、その報告書は秘密に指定され、現在も正式には公表されていない。しかし、報告書の内容は報道機関に漏れ、1988 年に、元アルゼンチン軍人により「Informe Rattenbach : el drama de malvinas」の題名で報告書の内容が出版されている⁵³⁶。その出版物によれば、Benjamin Rattenbach は、アルゼンチン軍は統合訓練および訓練が不足していたため、実際に統合作戦を行える段階ではなく純粋に理論的なものしかなかったと結論付けている⁵³⁷。

またアルゼンチン陸軍の幕僚学校の Juan Carlos Murguizur 博士は、同学校の講義で、アルゼンチン軍の戦略レベルの統合の失敗に関して次のように述べている⁵³⁸。

「アルゼンチン軍はまるで水密区画のように分離していたといっている。各軍種はその権利および特権を非常に用心して守っていた。そして、各軍による政治への参加は状況を悪化させただけであった。理論的

⁵³⁰ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³¹ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³² Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³³ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³⁴ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³⁵ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³⁶ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³⁷ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.97.

⁵³⁸ Robert L. Scheina, "Argentine Jointness and the Malvinas," *Joint Force Quarterly*, Summer, 1994, p.99.

には統合された作戦計画を作成する責任があったところは、実際にはほとんど何もしていなかった。軍関係者内では、この組織を「パンテオン（万神殿）」と呼んでいた。指揮官の配置に就くには歳をとりすぎているが、退役するほどの年でもない、上級指揮官のための優雅な墓となっていたためである。統合作戦計画は3軍種すべての同意が必要であり、必要な兵力および装備品は各軍の指揮官が要求しなければならなかった。このことは時間を浪費させる官僚機構および各軍種間の警戒心を克服することを絶望的なまでに難しくしていた。」

まとめ

『フォークランド戦争 25年：将来への教訓⁵³⁹』の編著者スティーヴン・バズウェイ（Stephen Badsey）⁵⁴⁰ はフォークランド戦争当時のイギリス軍は、戦略と戦術を関連づける戦争における「作戦レベル（operational level）」という概念は定着しておらず、イギリス軍に作戦レベルという概念が正式に取り込まれ取り込まれたのは、1989年以降のドクトリンの中にあると指摘している⁵⁴¹。

統合の観点のなかでイギリスの任務部隊の指揮関係を取り上げ、各任務群の指揮官の間の軋轢を紹介した。ウッドワードによれば本格的な上陸作戦「サットン作戦」の実行する最終的な権限を、現場の前任指揮官としてウッドワードに与えられたと説明している⁵⁴²。先のスティーヴン・バズウェイは、イギリスの指揮系統がウッドワードを通じたものだったのであったのか当時は明確ではなかったし、現在（2011年脱稿の論文）も明らかではないとしている⁵⁴³。つまり戦域の指揮官が不在だったということであるが、この戦域の指揮官をスティーヴン・バズウェイは作戦レベルの指揮官と呼んでいる。

統合とは「少なくとも2つの軍種(Services)の部隊が関与する」ものであるという定義に従えば、フォークランド戦争におけるイギリス軍の戦闘において、統合の戦闘として、航空母艦に搭載した空軍のハリアー(GR.3)により行われた陸軍空挺部隊の戦闘支援、海軍航空隊ヘリコプターへの空軍ヘリコプター・パイロットの配属があった。空軍のハリアー(GR.3)が航空母艦に搭載・着艦・発艦したことは初めてではなく、過去、実験的には行われたことがあった。

また前進基地となったアセンション島は空軍が中心となり3軍の兵員により運営された。空軍所属の輸送機は、イギリス本土からアセンション島、さらにはフォークランド周辺海域までの輸送を行った。イギリスでは洋上哨戒機（ニムロッド）は空軍の所属であるが、ニムロッドは洋上哨戒を行っている。陸上軍に配属されたチヌーク・ヘリコプターは空軍所属のヘリコプターである。

首都ポート・スタンレーへの進行、奪回では、陸軍の歩兵旅団が任務部隊に編入され、フォークランド諸島陸上部隊指揮官の海兵隊少将の指揮をうけるようになり、陸上での戦闘は海軍・海兵隊のコマンド大

⁵³⁹ Stephen Badsey, Rob Havers and Mark Grove ed., *The Falklands Conflict Twenty Years on: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005).

⁵⁴⁰ イギリスウォルヴァーハンプトン大学(University of Wolverhampton)教授

⁵⁴¹ 『戦史研究年報 第16号』(2013年3月)

⁵⁴² Moore, Woodward, "The Falklands Experience," *JRUSI*, Vol.128, No.1, Mar. 1983,p.28.

⁵⁴³ 『戦史研究年報 第16号』(2013年3月)

隊および特殊作戦部隊(SBS)と陸軍の空挺大隊および空挺特殊作戦部隊(SAS)に歩兵・騎兵大隊の兵力より行われた。

またウッドワードはペブル島(Pebble Island)のアルゼンチンの臨時飛行場を強襲し、成功させた作戦を「すべての兵種」(All Arms)による特別作戦の成功例と表現している。「ハーミーズ」に乗艦していた陸軍の特殊空挺部隊(SAS)をシー・キング・ヘリコプターでペブル島に投入し、艦砲射撃支援(NGS)で陸軍特殊空挺部隊(SAS)を支援した作戦である。極めて限られた準備期間(5日間)で、事前訓練もせず、無事(1人の負傷者は出したが)成功させたことを高く評価している⁵⁴⁴。日頃、一緒に訓練をしていない別の軍種に属する兵種による作戦であった。

そもそも1つの軍種とはいっても各軍は性質、能力の異なる部隊から編制されており、特定の戦闘を遂行するために、通常は命令系統などを異にする部隊(兵種・職種)の組み合わせが行われる。いわゆる諸兵科(職種)連合(Combined Arms)という戦闘単位の編成である。同じ陸軍内でありながら、砲兵の戦い方、歩兵の戦い方があるのではなくて、あるのは一つのアート(art)であると、その戒められてきた。

しかしこのような場合は同じ軍種内の関係なので、「少なくとも2つの軍種(Services)の部隊が関与する活動、作戦および組織を表すのに使用される形容詞⁵⁴⁵」が付く統合(joint)という問題、換言すれば「2つ以上の軍種が関与する作戦」である「統合作戦(Joint Operations)」の問題として議論されることはない。どのような兵科・職種であれ、その兵科・職種が母体とする軍種が異ならなければ、統合の観点からの問題ではなくなる。統合的な観点からいえば様々な兵科・職種の母体となる軍種は作戦実施単位の部隊を構成するための兵力単位を管理し練成するために編制された組織という位置づけであろう。

統合の観点のなかで、イギリスの任務部隊の指揮関係を取り上げた。統合した作戦を円滑に行うには、適切な指揮構成が不可欠なためである。フォークランド戦争におけるイギリスの任務部隊の指揮関係には既に取り上げたとおり、曖昧なところがあり、現場の指揮官を悩ませていた。

ウッドワードによれば、ウッドワードは本格的な上陸作戦「サットン作戦」の実行する最終的な権限を、現場の先任指揮官として与えられたと説明しているが⁵⁴⁶、先のスティーヴン・バズウェイは、イギリスの指揮系統がウッドワードを通じたものだったのであったのか当時は明確ではなかったし、現在(2011年脱稿の論文)も明らかではないとしている⁵⁴⁷。つまり戦域の指揮官が不在だった。この戦域の指揮官をスティーヴン・バズウェイは作戦レベルの指揮官と呼んでいる。指揮関係に関しては、同じ海軍という軍種でありながら、任務部隊司令部と現場の指揮官(任務群の指揮官)の間、さらに現場の指揮官の間で、指揮関係に関してそれぞれ異なる考えを持っていたことは間違いないであろう。このような状況になったのは、臨時に立ち上げられた司令部、臨時の任務部隊の編成という場当たりの対応となったためであろう。

フォークランド戦争の最終的な決着は陸上での戦いにより決まることを示しているといっていだろう。

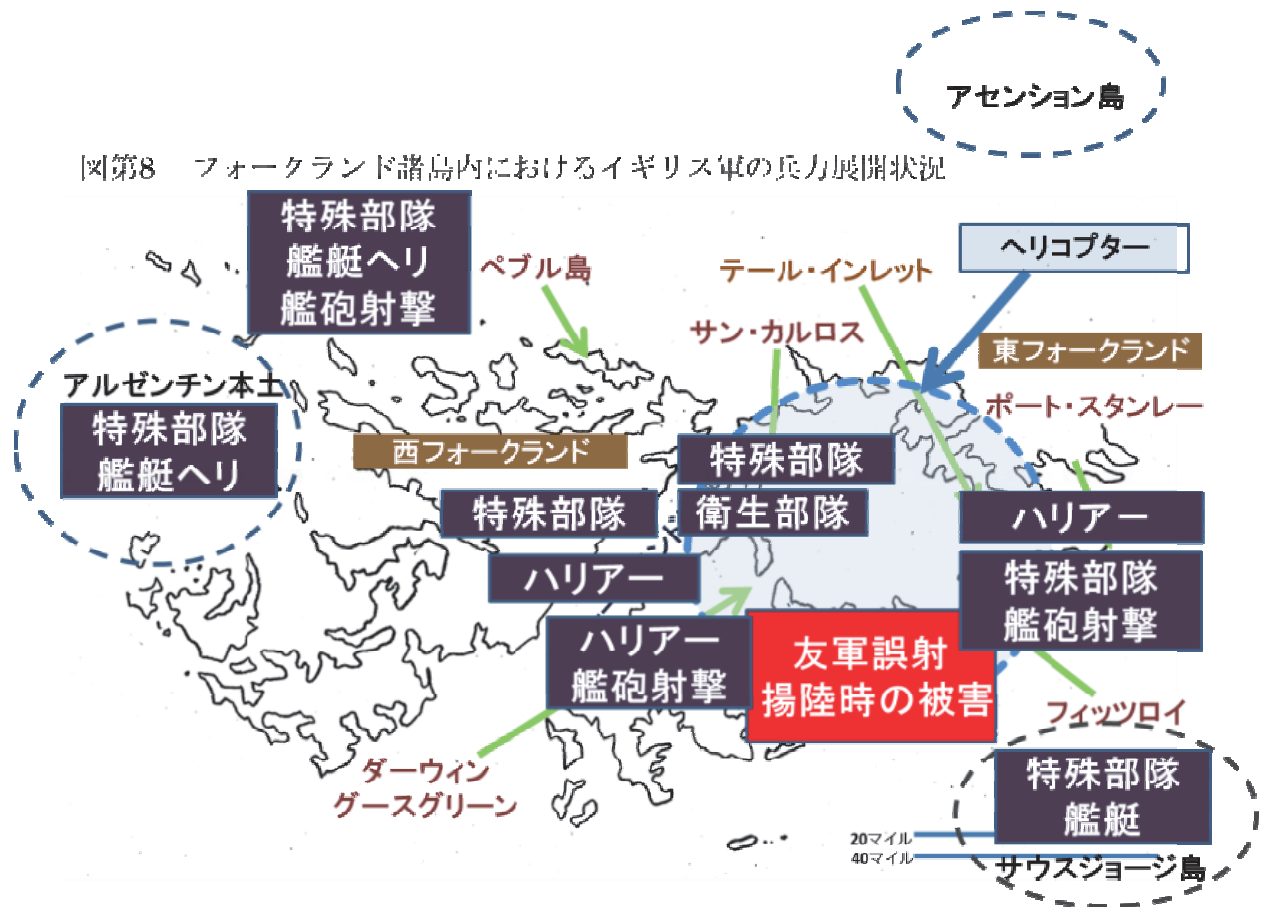
⁵⁴⁴ Moore, Woodward, "The Falklands Experience," *JRUSI*, Vol.128, No.1, Mar. 1983,p.28.

⁵⁴⁵ Allied Administrative Publication, "NATO Glossary of Terms and Definitions"より。

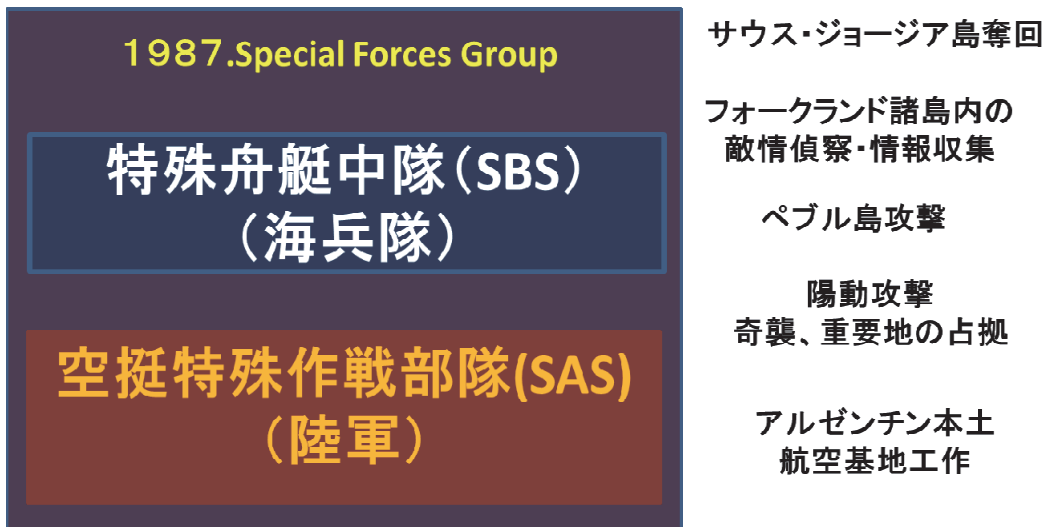
⁵⁴⁶ Moore, Woodward, "The Falklands Experience," *JRUSI*, Vol.128, No.1, Mar. 1983,p.28.

⁵⁴⁷ 『戦史研究年報 第16号』(2013年3月)

しかし、もし海上の戦いにイギリス海軍が敗れていたなら陸上での勝利はなかったものも間違いはなく、フォークランド戦争におけるイギリス軍の戦いは、陸上の兵力と海上の兵力、そして航空兵力の3つの軍種が協同したものであった。



図第9 イギリス軍の特殊部隊の主要な活動



図第10 2004年頃のイギリスの国家レベルの指揮機構

